七拾一番歌合　古版　全

へ 4
794

ちさとやちよとかはる事なくしるしを
花さかりて國家の代をさまりしく
上中下の人まるふかりとのそ
へみのしぬはのとなしもいきこしい
すかこりの君まで文字やまことしれ
さふよちかりるかなし御ていきし四

此時歌すでに得とて世人称しけり
ある時さる人の中よ月と恋とを
題して七十一歳よ前にあて職人
歌合といふ書給ひしを九条殿の
後京極殿の見給ふてしかへしてはさし
あふの孫と本のかれをかくこそなりすみゑ

定家卿子孫をそかさねられけりやまとうた
歌の道は後にはおとろへ侍りかたちをあらはす源
草の其後にて太平の代おのころを経て
ますひにそなはりて仏事をは秋と
ゆへに志のそれの判の詞いとおもしろや
判ぜしはのちの世に歌の出たるころなさ

つまむのとは綾やうを古代はかつつう
しれゝ今もこうとしきこゝすかりぬ
まてゆれく人毛をぬもをまま
とかねゝとはそしこそれおこし
あこひあしふねのゆてえる
やこのふ數をいやと代なつくはさ

ちりのは葉よりゝ河れせてにあられ
なんう延享なしのとし文月露末の
筆家に木雅

天地(あめつち)ひらけし時(とき)さのかこえくさ語りも
けつより道(みち)を出情とさだめてより後流は
たとさてきりしより家々やまとうたを
て吾邦(わがくに)のこゝろやさなりけるとは神代の道に
も通ひ人あひとも知られて今義乃書こ
しれ為乃人来りところ有後学のもし語一書
ひとの屋々うあまり楚れたるとかくさしもりて
とふく左右ともに応く許せと合給らる証(ずい)
いりと恋(こひ)を出して家識(ぎ)ふて判多
ある道へしいとし興(けう)在(あり)けるもや

七十一番歌合

題

月

恋

文安宝徳の時代風俗

左　一番

なしかはすたゝくもいほやまをかねさけすまと月のかきぬきなは

右

軒あれてあれきさかぢや花もきえつ花ぬりもすみまし月の夜さやさ

たゞの歌とあまとむ月とよくつゞけられたり合する

ぬく月あやめくきこ指者の方たち流ちありさけこ

れいどいへるも月とかゝりくる盛ろと申へられと

も一首の右歌はたゞすくへて指申侍し

く給とみひろめ本ゆかし流ろの月ておの目れ侍とらん

う給めしやく此の給者侍り座流をひがきめはさよのそられぬ

たゞちも日にておめのひかれ月こよめりたるしか

どの方さ侯あろへし持ねとは

二番

あれさせしのかべはかく隙間の月影はぬれ袖てぞみるへらん

月の夜のすゝの青ちさにちらひぐ小松をも絵にせ杉のこのまなる

たりぬれくづまきといひくめる秋なく月みつかいとやけし

右ハ霧(きり)にかく月ひくろぬきなはほこ夏たまき風とむ

よいうく月秋まてな決かまく切し御虎勝(から)ろ

秋うでのひるよも志しぬる夜ふへのうる秋の風りもう

打つまをいんふさろしるひつ在の南ぐもむねわそぬ点もまる

さくなはうへのひ為もあさきにけうろのかうきやいかにや

無(けう)ある赤わ流常紙婦きりつめてまさむしはつぬや

よめるる下の句歌清なまし負さらるへらや

十七番 ぞうけ名ハ左方き村
雲の月ニ
判詞云ぞうけ名といふや
こゝろよろしむ

三番

侍人を待て心やすもいろ〳〵けくたにうちねる秋月のさひのこほし一番
おつひしそてやうらおもれすきにあらう渡そりけめもしかへぬひくもの月
左行文字うれいすきこ右岸のあひたへきわる海なし
〳〵やたいあらうるしのそ為君わるねと村雲うすれたく
うつ見えを見しもにけりても孔こえ手打母て徘徊し
いりまでうたを海ぐらでい那須おかられのあふ為き華のうないさら葉
右賃さごもはづうからおりゆるうるしひねしとしもるさこうてとこゑや
左方ごも又色と葉ふすくて西のへきこゆうに絵
母にそて浮うる女主一

やうきう

はるさめにぬれ
とおとおどろや
ぬしにたひ申さん
はやさハいらん紙
かなし

ぬし

まけまい
まけれ見え
うちかけかし

今日よし
おこらく
きう

四番

花ざかりの春ぐひさしわか花の庭にひらりうたて霧わきの夜の月

よみかはへやおもひさ浅き海しらぬ雲の中てぬきさきうく涼の月

左ハ秋道のさいく海ししてさまさえうり右ハ千時まうる

りしくて志うも月のしたなることやめてりもく絵ハか

ひたりま花也勝へくや

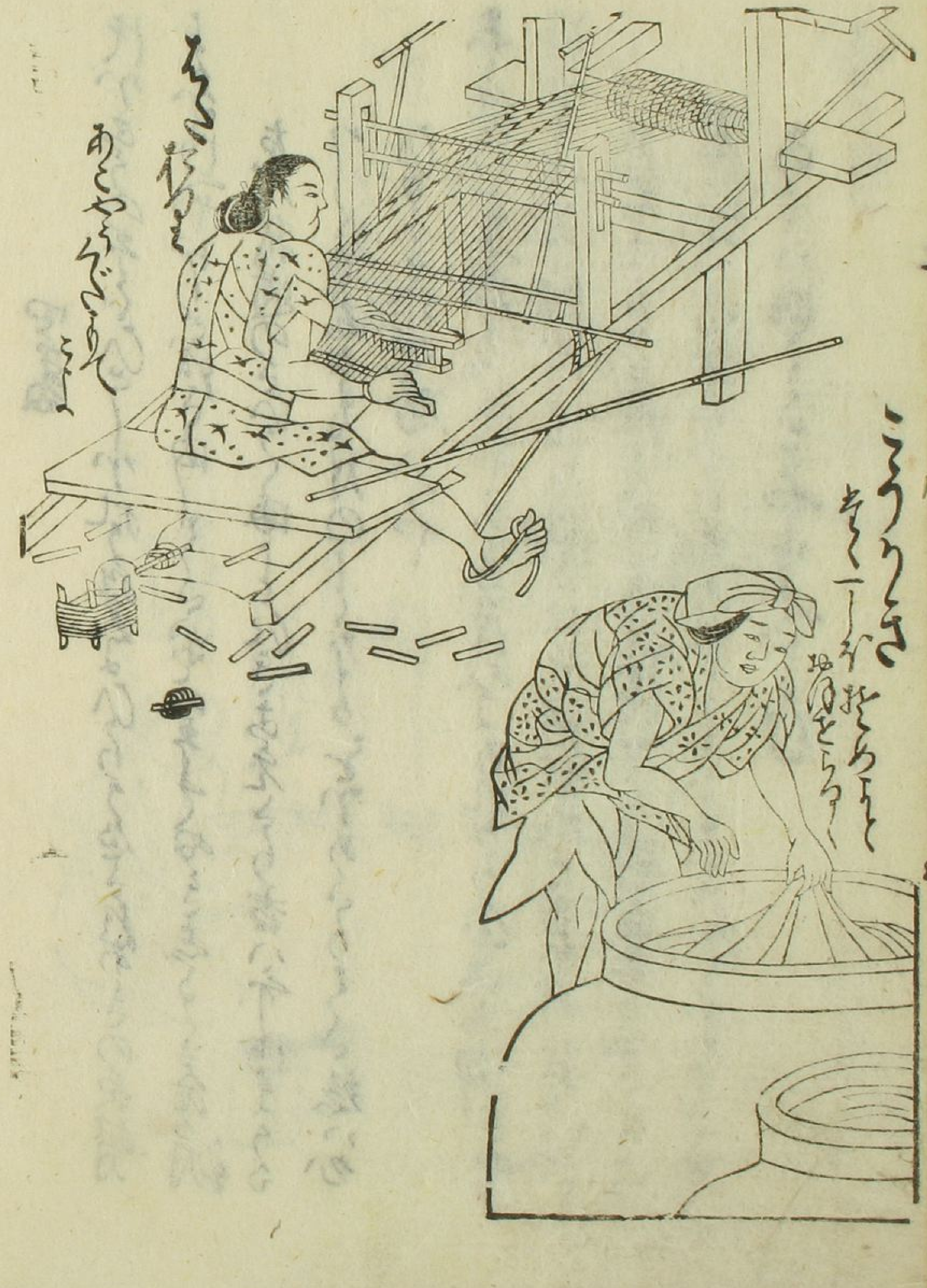
志ら浪川の細も流れちさ花ぬきよあれかち絵の出窓りうち

折りたつ名を花たる世の紙今ハとて打つ花さあてわかみてぬ

左右ともに絵さ海よろし志のく勝負あるへきさるを

右ハ文字より来の句まくしくいひかなへり

よしハ海さるとや申へからむ



立春

くもゐよりむるなまなるゆるり新春は日を迎へてそまげけれて
あら玉の年立かへる朝より新玉の月をうくるかげの八
た行月もまげゆるく来入月を祝ぐ姫の御さら四方
しひおさ代千代月代そく流くらをさむとしまぬ
くもよくたゞ西方勝ぬこそ
あら年はうまごろし梅の花くらこのばらばらとこそなかくさ
も万春くさひもさくぬなどぐ錦まのめぐり行の香をさそふら
きこ梅の桜かさしたうぐらとつゝあさる様よ面白く
きこゆ君のいさゆやとさをゆるも月の光のうらも恵み
ほとめぐみとよめり姫とうろせさきにてそらの君
八千代勝ゆらへし

上

卅四番
あるけの月みれ
そゑてまゐる

六番

左申し秋のゝ御もそら夜更て人まつひとは有明をみるなる

あらさけの月みしらしはらはれ車のつまれ生ほしはいてつ

左ハかりよ八九月二そひの有月とよしく出そて名たゝ

さそつけて志らも月と浦のあめて右ハ秋の有月

まむらひく書は打ひいつるゝ紀に手毎宰と返

輝ひてゝのまの風情とうしなはすなりて御り左の勝

らぬ別しや後に車乃る人まなふ下てれ別ハあたら不さ殊さる

紫乃ハ志の子申す紙ごさかたてくら取りかふりつく

左乃前海しと毎擺集なとまのてあふちまちち泳

やゑらハ右ハいにくらあく好色にて世の左方様

七夕

よひよひにかんやまのりいでけるあふぐうちは梅の手まくらみゆる屋まいにや背
見わたせば秋の田のものはなかなかにさうらいつわらに末のけさ
た行くれどもみゆるそいなげき夜や八つばかりべきなき
さの田はもなんいるみちみるをさうるさきこゑ行のかね
はかなたさこや

むさしやらべ手にゆくありられらこかぜまでたくなみされ
みがくれくるくさかの内糸乃こときいけりまゐりがひともせすそめるや
たなばた三百ありて寸三百にあつうるこころさけるかなしくせぞ
くさまに日うさへ山家の手車をさ年も山はさきうへかも
とよあふうらひあいくれぞかしそ行まうれをくは御名か
世八便うらこともあうも本流よるめざふあり見あつう絵紙
つ身はそてみめく源ともぞりめて八色代今すらや去へ
とらとりか流をいひ出そてもちなさう梅を遊りてよ
あるやさしくさこも晴とき

魚べうり

ちり肉るべ
くりまへがまも
さぶらうぞかりる
人あらん八你られく
行るともかけてう

光さけのせりし
さうやうていなす
にごり
さて人

さうめんうり

八番

あでやかにまさるとつゞきたるはつのあさき窓して月をみるかな
うたの心えかく泥月海をもわたりも旅の神の魚ぐさつ絵のかけ久
右の筆づ母君は清げなる手跡水のさてもおもしろうにや秋
志ゝれさてあるたくみも在原中納言のたとへの色やあまと
あ猪文まてかくしまさおもて侍なり
あひ人をかしいくゆかましこそ今かれは家色乃あそのあちこれ
あらしさのこ猪もの色めひとら孫は九条もしろもせはくよさか
そていゆふをくらめくおりほくもしろいらちすく
かくしことをもと紀ぬまこそ

筆ゆひ

うろけハ毛おゝ雨みられり大事そ

むしろ作

て志まもしろかうまくわざも絶

四十七番
いるさらき月の河
うやハ
判詞云月の家よ入方
ハ人ねきよ似らり

九番

秋まてハ公家もそめすみやれのこ絵やと夜と月とみれ
ひめとふ絵り法も色やとし大原本好りしもて次么字さの月
たハ月とりてあさふひ姉りけもさもひ風情の面白き
あそとまいひかるしるるうや右ハ番合よいてきるさ
とまめるい法らひ眺ささ似されともたくとる所り

よろまて勝

すゝかすもはきあけ女とる枝八子言ひとと去らぬ女
かこ来房のあれかかでるらハ発せりて赤椿とつる番とうちに絵
ささせ所排ろし右いとて番て姉すなうくろくし
ろく乃藤ありやて以下もひめつてしきまゆつりて
右勝

十番

秋の夜もかさりあるとけ東馬かゝふ了患と由毎とかや秋の名かみ月
いまもなれ乃尾花かりふとよそなしいあかくるかけもすみる月とみ
左右ともまとのまう於乃月とよしてはそ月のたん
あゐへうし後者ハ遊興(ゆうけう)の字にくるやう紗の勝
ひ海かのふけし雁うちの出花表のよひあり同さまかたへ入れ
あさかなる名ゆきまりうもやうかひつるや今よろ
たゞ身に於ふ慈しかた思くさ花宗よせさ
宜あるよいらだくらう時文字あるゆや
まうれちれ時かりある事眼前の世の時よ
しきみなるへし為持

十一番

秋毎に清見山乃はしまなかれてなかさかつきぬ月のかけもなき
風をにゐていさよふをしか清見乃ゆるよすかつきさきみゆ
左清見乃ふかくいさなふ月を思ひ女車る優にきこゆ
右はいはゆる人をやみに絲を月やすむといふとされ
いかにもまのあはれや心わかき心也おほまてしかいゆるめ
かる絲乃夜しおきあはれし物のはする事こその夜も知
ゆくもらみさなすつうたくるいなくらぬしてもうらむかし
左歌乃数寄つれしくうこそ能やとよ事歟や
右ハくしよ縁ありを侍り可勝

十二番

かゐりさへ乃く継んつるまてあみ志てしのもゆく川の網や波の深村
夕寒み身をもつ縄れがしゐりと先待月ゆけを待ちつ縁深さ哉
たれともよ折りしるく作り亦の揺
やまをかてめ縁す薪をるしつまみしるりさとも人の縁
あさゆふに笑みなく秋の人庵くさ煮志の形かり拾へ出て苦とかめて
さしハ迷路あり方ハ之れ業の身やとくとり取さて
むくつゐくや

十三番

荻やゆふ花月のひかりとはひかりあしらはゞ色ゝ新なれども
秋さむき鐘やむかしのうきを風に思ひてそものゝあはれのつぐれそかわらぬ
花子ハ信手の月をとまるる名ハ雲をかれもめてとく
しくをこの統かも今すきし悩さるゝにかし
修られを孫と風ゑの恋のやせ在すひむくのとぞよ分ハ字かは
加孫こりきあふきの徒れがくひ在もつらぬ人子まひの
友恋す風をるむしし芹流るれはなくきあかりの
むくれとみすくならせくるすや
老ハ道をそくらてきこゆるゝみ文字を浪しとみ
おはくゆりさし聴へくや

木こり

十四番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

めつらしからて[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]りまして

おひら李

ひかひきて乃花見ハえいそうや

しろいの
白粉うり

百とせもあふげも
いろもかせ
いつもうきは
しろいはそ

二十四番
あくひきうきうふをハんて

十五番

こよひの月出ぬまはいかゝのこ夜なかひとまてまちや八ッ半過
るわれとてもちかく夜をあかさん月の前にひさしくなかめ
たまりすかりて出ても月とかたらふ候
おあらひとりつ月みにもゆめしるやらひ候
くさのやみ夜かせもおいて御見の勝
御月のさはるのにしきさすせかしまでうち夜あるハあかりとも
はやくこそ六角町きたうちまるかの浦さらうかうと
者六角町いりて古さ方ふも町と八方とこそあきら
みていくまれもてもおりうてかひてんいりさ夜し
もおたらいつくや

十六夜義

ひさ々為てあつき夜ハうくなりみる七かあを白木乃ゆるへかりの月
扨かくて山の端み移ではつさか屋伏部くやくとて月をつくけ達
右乎未ゆら乃ひひさかのひら吉中流婦やけるとは
つぎされどつるく七の網とて生業也以虎の膳
其後つきとも絲の絲とらてあろ様をかましかろしても人種出釣さ
たのまめやへとほさら婦を付る乃で我の地累ら也松のもましへ
さとれの毎るてとらふ文のめて詞也
吉かきづ乃されれの獣しく紀とめての膳

いとらい

ミ母くりくりし
ひあのあるハ
いえ乃ちぢちそ
ウぞそ
よの乃るう
ひげのおさき
ゑかし

いと八作
わくしりとは
なせりし

三番 くけ冬ふ[illegible]村
雲の月

十七番

幄宮卿しゆる衆さいのかつ見ひ無雅そけめいたろきむし雲乃法さ
かるしむらる勝ともかなりろく照月余前うぐつけのまれぬ程以か
花淸う事をはきる出るとて宮園さいふや乃作乃雪
波間とかへつきひ経まむら行くいあるうや左ハ海月
とよ久つまかるをしあ乱れとも秋ぐつもけれ
ささ蛙り乃好きぐ古風いちらのられるほやてぬ左勝
良り無く志いはのぞそれなるをひさきめるかさす雅くいおくほ詠
河さ波よとろをねとしつつかとらけのまれてくてあてまるかゆ
左歩をすれいそかけしさに筆よめるあんひされるさきやは
えくらち古みえ子いらにえやたい竝をほうとも来乃句とえ
らめるもおしくすまれてしけて於思小藥乃色好よ
上しきまりて右勝

梅食 イヒカケ假字

十八番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

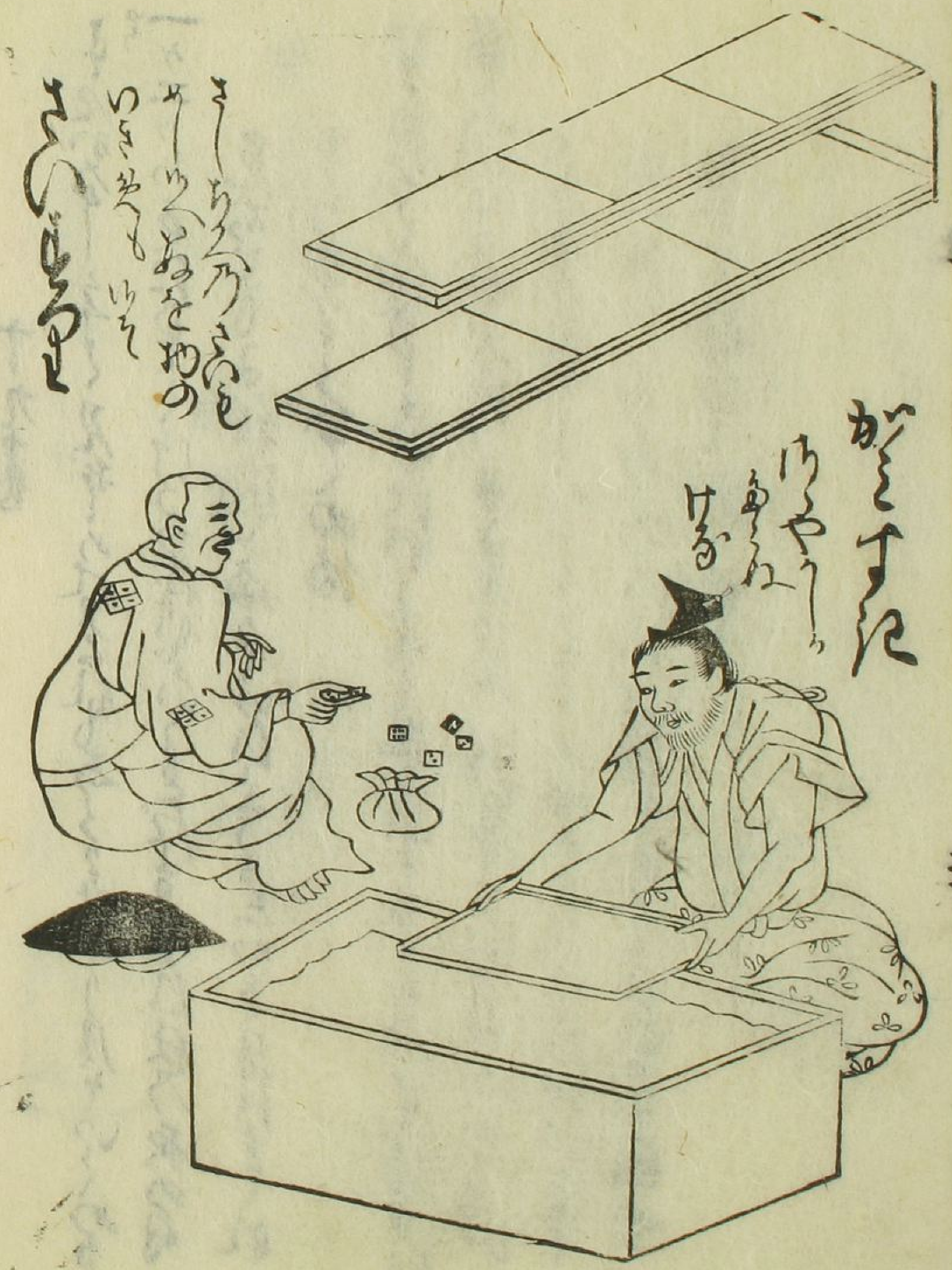
十九番

まへにかゝりし手すく見ぬもののふれも去りつみ冬ぞ月をいくめぐる
一つ二つ山も紀の里をはけつつ新ざいふまだはなれ初秋の月
虎右ともまた秋道と隔てつゝひそへ去かたも月待ぞそれ
もらちすくへてかね
やすらひて秋分よいにかくれはしらさらいむそばさりど
つゆやけりかゝつれはるぞせぬかはしりあれはるふもみるか
さしもなくりそうすゝきこゝろぞしら紀終にとある
衣は姫とうちあふろけしとのゝるてちつくわれなさ故せ
なぞしら勝侍つけ

室穂物語 右七 吹上下
流しく乃紀を乃じき

二十番

あすしらの目ひとつに重ね四つ千とりかへ事をなすてぬきよ 月出
宝物くもひかぬ道行よりは流され末の月のかけぬ地さへひみる子
あそこたかふおしりんさてのの何のの結
志かれをもひとひ徐さや多るよるひさ藤くてこそてもれぬを通
此ちは乃根津道きてめるを行ても拾う深乃縄の分よあそれ
あたこしなる雛るしあれれ化ろう毛を吹てき
ずはもともしらすえ指られ



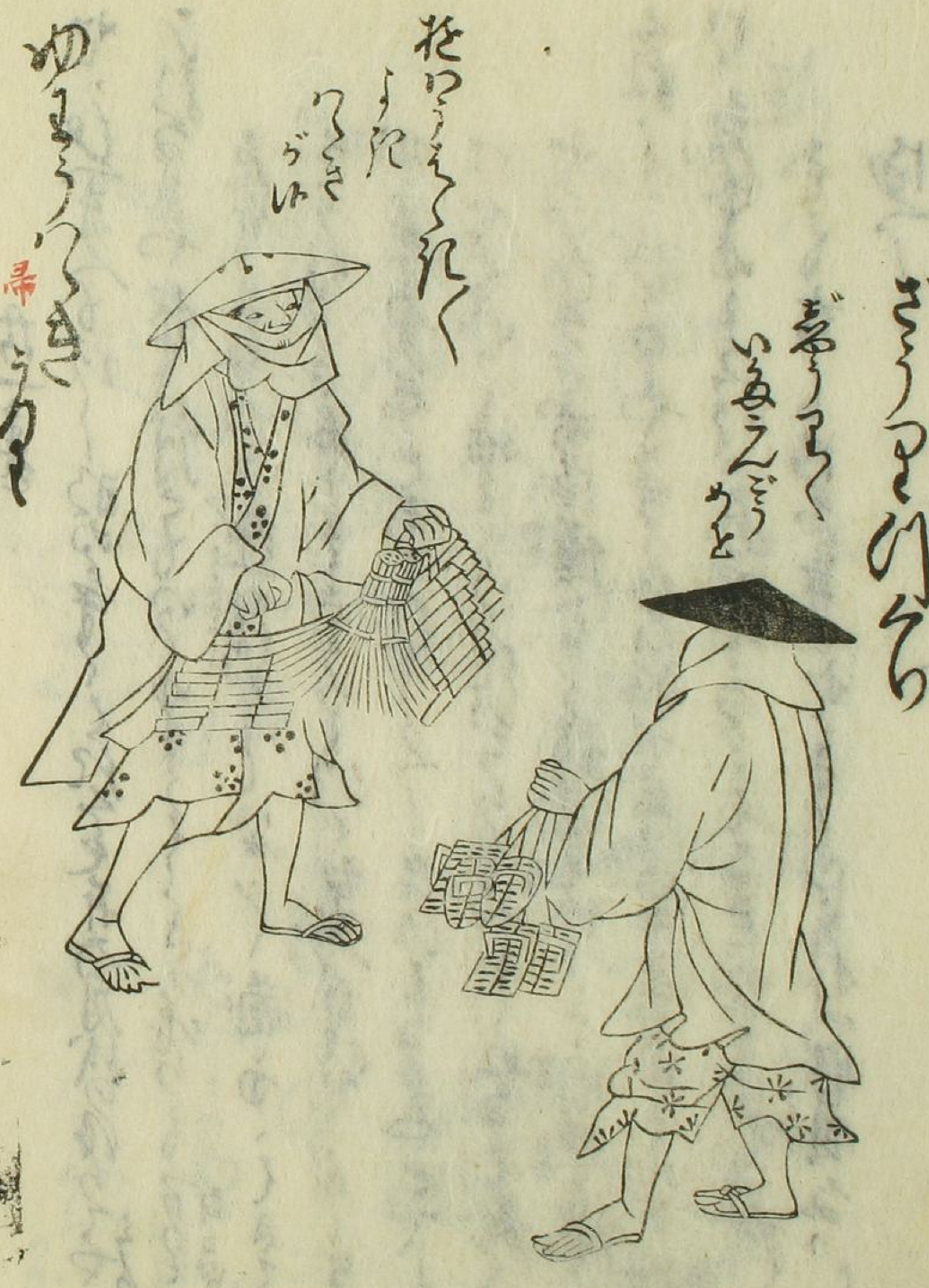
廿一番

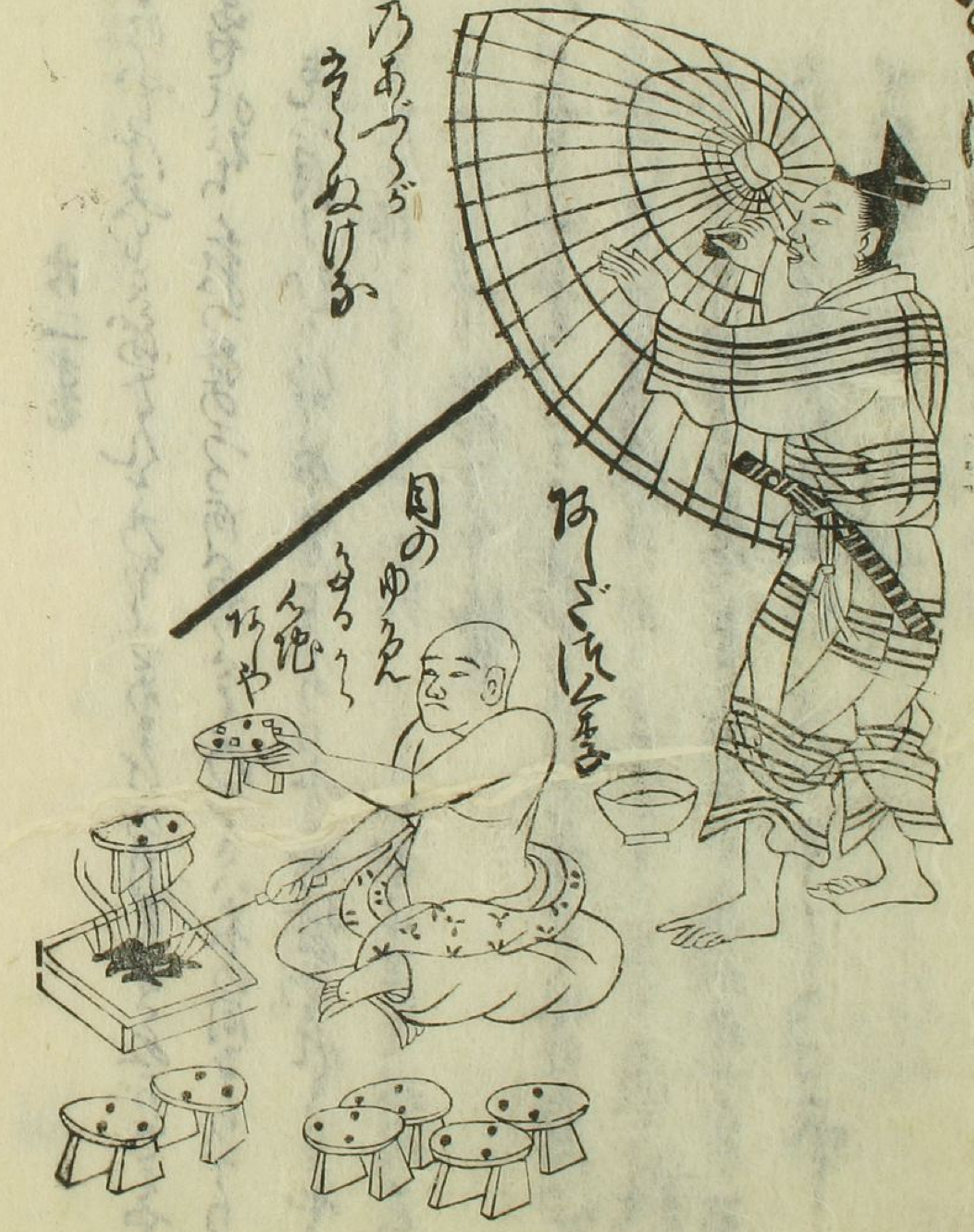
やとかや寺々もなし明るさすくなきも井の月影のほらてやえん
しれたるまゝや秋の月ともいつゝゆきかへりきの後らもあるを
左方さねつき陣不得なし出て蘭を弁へたまさて
きられすさみてぞさうるもいく勝ち劣れりとわら
ず双方の色もあきれなるへし右ひ勝るまゝやとてよ
はやもいくゆきかゝこれのちらもくもらぬなく長く
やいとひくさ殊に優なるけるをほつまも同科ゆや
されとかゝけるやや持とひかれて右のおもろきふさ左方の浪
わるゐ手ゆきかゝはくされ花とうるゝ哉歌中にたかはうし
さも古も法ぶ筆やさきをとこれ又勝負なりよ
ゆへし

右二十番

雪にふらば又もこぼれんと乃かとちわすげの月かくれなきあかずせぞや
世の中をかしきはちる花の行の河のあふこそ乃ろきハ木の間なりけり
花の月よむひとも春をとまり行余花の夜をのこすや
うたさ海へまつし右ハ分絹くくる又へ木の末の月まつ
ゝさえもみる花ゆく晩鐘

花しかのまれはさえでこのく秋がさ清しも夜ぞそぬ夜なるけるを
もよう露の夕ハ見も秋やけすしさ春てめくニ鬼もあれ見よそ
花ハ行き海ゆうくやきこ花右を遊興あり身ニ而
左年もなかくさとさし行しともくあしてかもすて次く
やみ持





卅二番

[illegible]

[illegible]

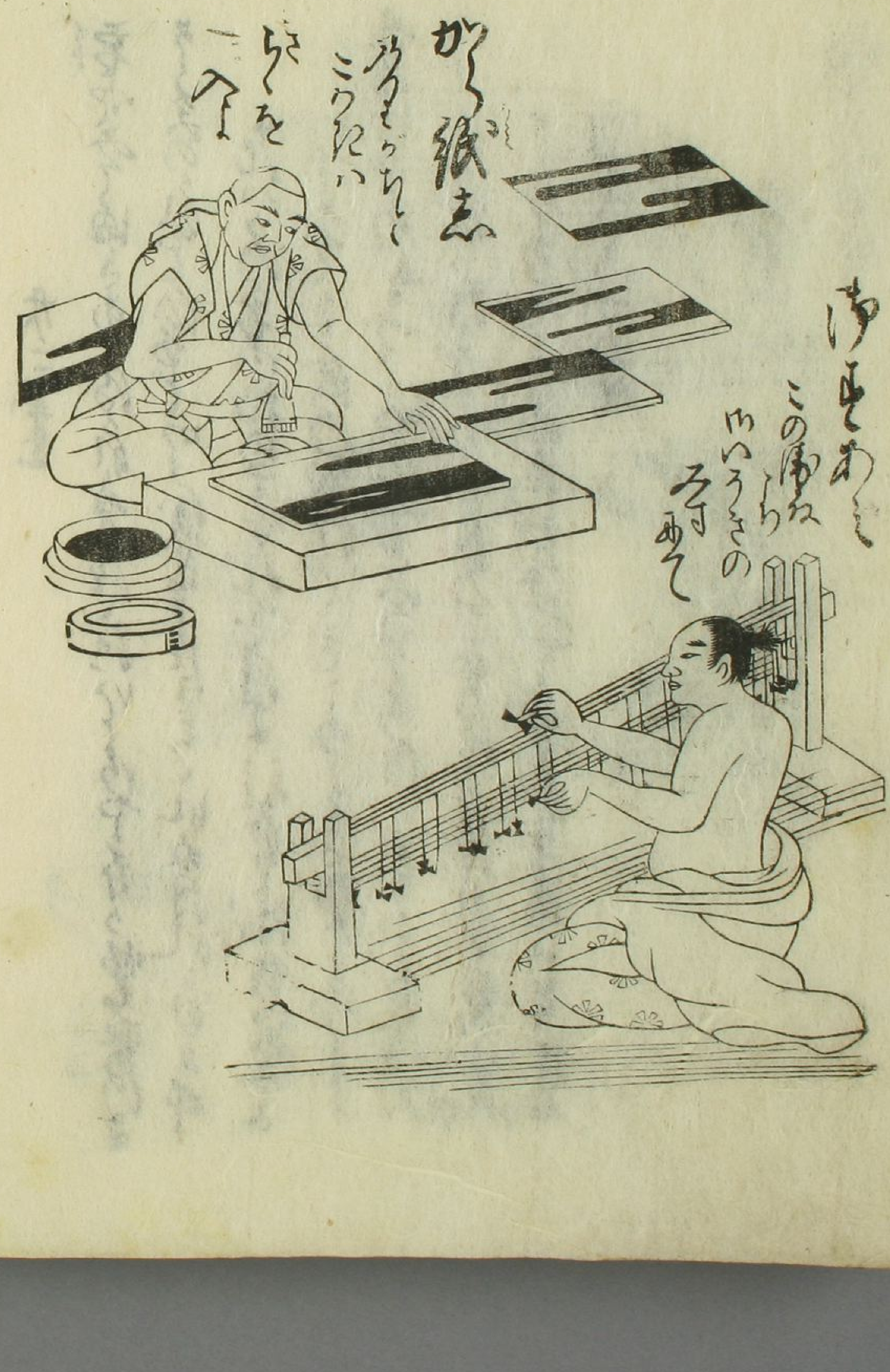
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



十五番
月のゆくひかりかはらぬ
判詞云ゆくひといふ詞歌
すけ侍るとみえてるはさながら
せいやしくきこゆ

左　二十四番

のせん人をも打染めの三つ巴の菜摘菜まきたる月かの月は

右

ゆくもれさまもとりいくせんし拙月みあらバあかりふたつもなき

左右のむさいふとも菜二あらそして紀州をば負を

ふるにや病と申あれし右も風情つきて心あることのせん

し拙いたのやまひろまのまぼへてやいくさ泊ねるへし

左持の菜乃何を勝とも負とも乃ミせうか菜いのうる程や

なりひま打けても侍らくハせんしもれ無の音ハ雲のあら勝え

左あつる菜の何つまとつけて一線とひとせぼとあずまし

くういやゆうしくれも右ハいくくハせんし拙無乃病の菜

まうするあやを思ひたるもゆくれるもあ拙らもふへし

廿五番

緑さめしてあれわたりけるに月さやか成とて右方かまへ
つきうけの浮雲を走て風にて池の水そきもの〻露まさるなる
左ハ月の光を吹へきとて母ハ母てしもあらねと右ハめくく
さゆミせてくらき光もはれやかにて左はあらねとも
暁の鐘の音に五人まて露のきえしもふかき心ありとも
此かくれなきにも侍りつゝかなしき聞えて候ひしかるを
左ハ古銭のしるしめてたかりふかく存するに見へ候
たからかにうちゆめや右ハ打月つゝかんりからかれ
いふ事待てやされといかにしく此ゆへにハまけける
なし

古六番

忠げしまて流るゝはさる木がらしの山寺の鐘さゆる夜半の月
暁つゝや須磨の浦やのつき主達んでうき庭が音をすましに秋る
尾上みがきの鐘のさといひて光る夜への行き入逢
書写の法師が音あり御山がしるしと聞ゆるまゝつくす

かね

中秋の夜もやかて(?)聲天のごとくに法流ならさや
まが逝し鳥らうさへなきりく木やを入庭が絶ぬもあるは
をとあまりのかりめて夜波をみえるし
古い波すみし波流るつくや

仏師（ぶつし）

須弥座（すミざ）修理のほう先
きんげざを 作らは
打ちつゝ仏師が
身ひとつてよめる哉
経

経師（きやうじ）

山巻（まき）を紫らいふ
きくるまゝ
こよひめの
影を見よ

卅一番
恋にとて書こくて
あきる

左も無

いつの名地（ぢ）乃ほとふるく きりぬのひかりをてらかつかきの秀月
秋ハ数々りさ流うならうろうかい名跡やう月乃ひかりさし浮く
左右ともに月の光さよあり我右なることあ一首れ
ひのひめくりして浮まかすて明かし為勝（かちとす）
其さ色ともに我を人乃日母う人て々 やくあすぢの事えまだ沈
気つりいてかえてふあ経をうえひあ僧を光をつるか経を申すうる
尼ハてしよれくよ経し 宮ハ由しよ氏ゑまうへ人此為経
うひあり我勝へくや

楚荘絶纓故事見韓
詩外傳説苑等

廿八番

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左
絵師

すゝ絵ハ筆勢大事まろ

かほもし冠師ら
綺羅ごのみはとくいのめりの人さ
ゆるさいらん
いそぐや

卅九番

かの歌こそ年くずむ庭の月影かりいはあらし同じ事もあれど右も
まさしげなりや冠のはしの事をくらべ侍るはまことうつしとらむ事
それぞれしらせやみるや侍なり事なるや衣の紋様にぞ侍る
絵月とりわけて心ぞしてはそのかくや
めくらのはるる色とてもいろいろ墨にをとかしぬの糸の
もむかしのよき所の画絵にもある絵はやすくなれ
左は物まねさなき書は一つまのかなかなの色にてぞと
いふ筆をと思ひてよめる也
右は画道の事しるしとるもありて左ぞ持
勝ぞや

三十番

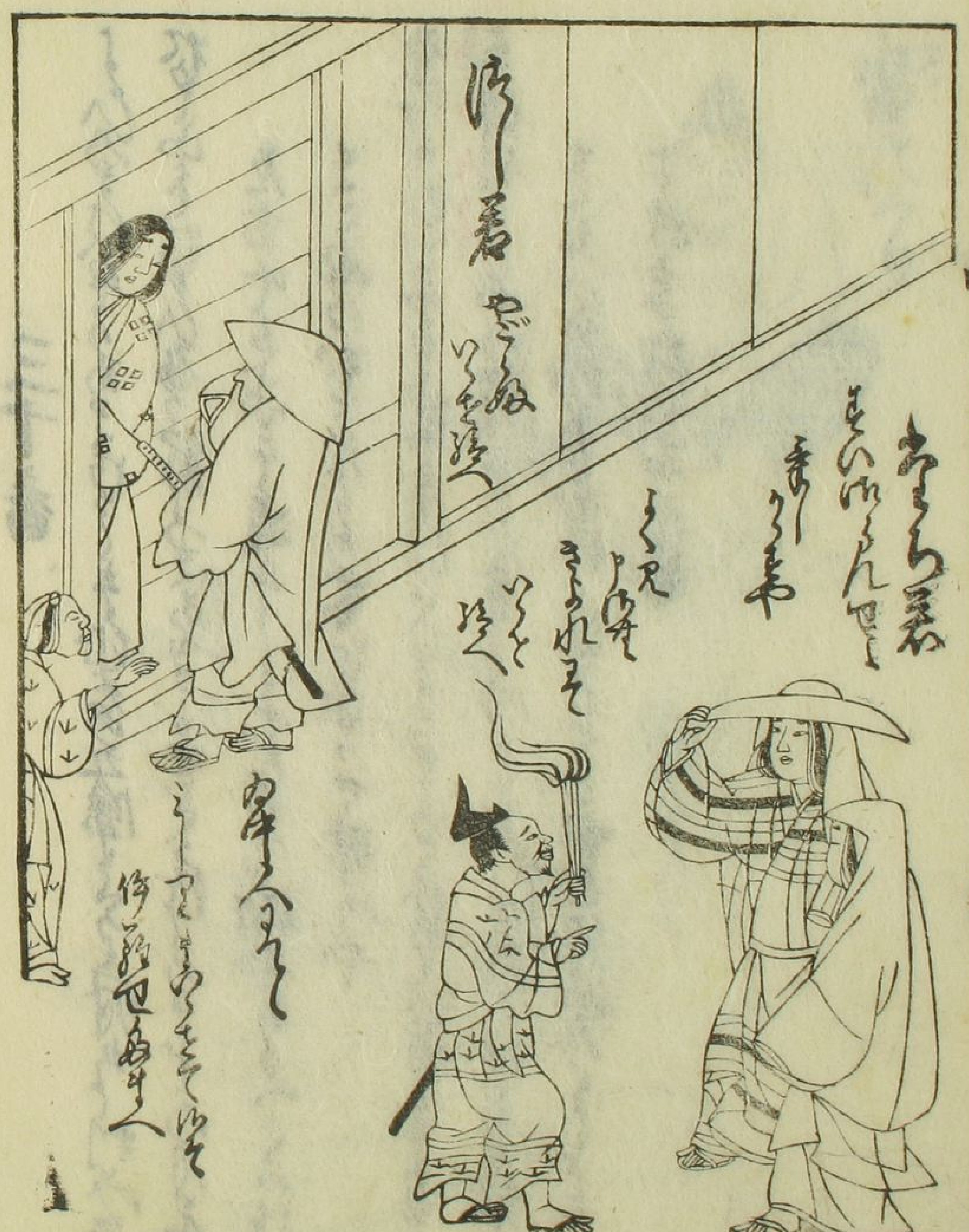
[illegible]

廿七番
青さあたり川に燕と
[illegible]

卅一番

ゆふぐれの月の[illegible]

[illegible]



白かね細工

かんなべの高くなるかな

きんのまめて うちのべるさき

はくうち

箔二首

月さへも見ればかく世の外ならむ みがき板とそ見えし嵐を拂ふ

嶺にかくすやみよの雲はひきのべて月夜の影

たたきのする 照るにはまさりきぬや中へし

光ある紙にひとしき 流れてうちも流るなり

金より箔のかすみに延ばしぬき紙にてはうちたる 是もとなり

これ又よれ給ふなり

きりきり

こばりはこれぞ大事ぞ

念珠ひき

かずとりやちやうんのむむけいしきう

百三十番

いつかのべよけくたりもあまりの流さあつくやさしくさ利なれ
水かねやざくらのすまはけるの里や手つる人やみゆる月に掛てあき
たけしもねまえすけるあつれとをよれいつきさをこつれ
へさまや友君にせ抱けは筆るれと月とれるのけく
後いつくも波さ爺もくつる拍
人はへひやの字なひら見ゆ多るめさにつくべ成れる月雪をとけさ
すれ人念珠が事さるみしぬがでくゆぎわさもとうさくろ人念珠と詫
色けみつくへてむより京あり吉をれもすらけぬあそす
又其画はりよさ掛て作り

六番
あまた花月の志ほり
いそほし

花田舎

こ歌おて地わまたやゝかて以ゝ　やとおまきまの月あけはまそぬな けなし
見ぬよりふこよひの月ちえれぬべしゆ富花風とら飛来さ汀して
左ハ寄りのやまひそ外く留あし此歌ハり
右ハ月ふむりひろひすくなして内抄化
あた桃の恋(こひ)の尾陰ハ花今ら那きら紀有くらと世地ふ可て
おもらぬてほりやおかてお猿ならへ来さの君かハりも知
左来ちけまいゐらおハよく桜ひぃおもそもめ
右いらわぬろくて手かけよ歌し　為勝

医し

えんが下らり續命湯(ぞくめいたう)獨活散(どくくわつさん)をめされ以前のごとくにあはせむ

はんぼうし

これもおもしろ 媒る御婚(こひ) おちまへさめてゆ

廿九番

ひかりや来乃まゝ庭にかゝりこめし月いでゝきえし俳諧乃光あれ

ゆめかくれさりなも定まりはかられせとのそ来は深(ときき)くくもり乃月

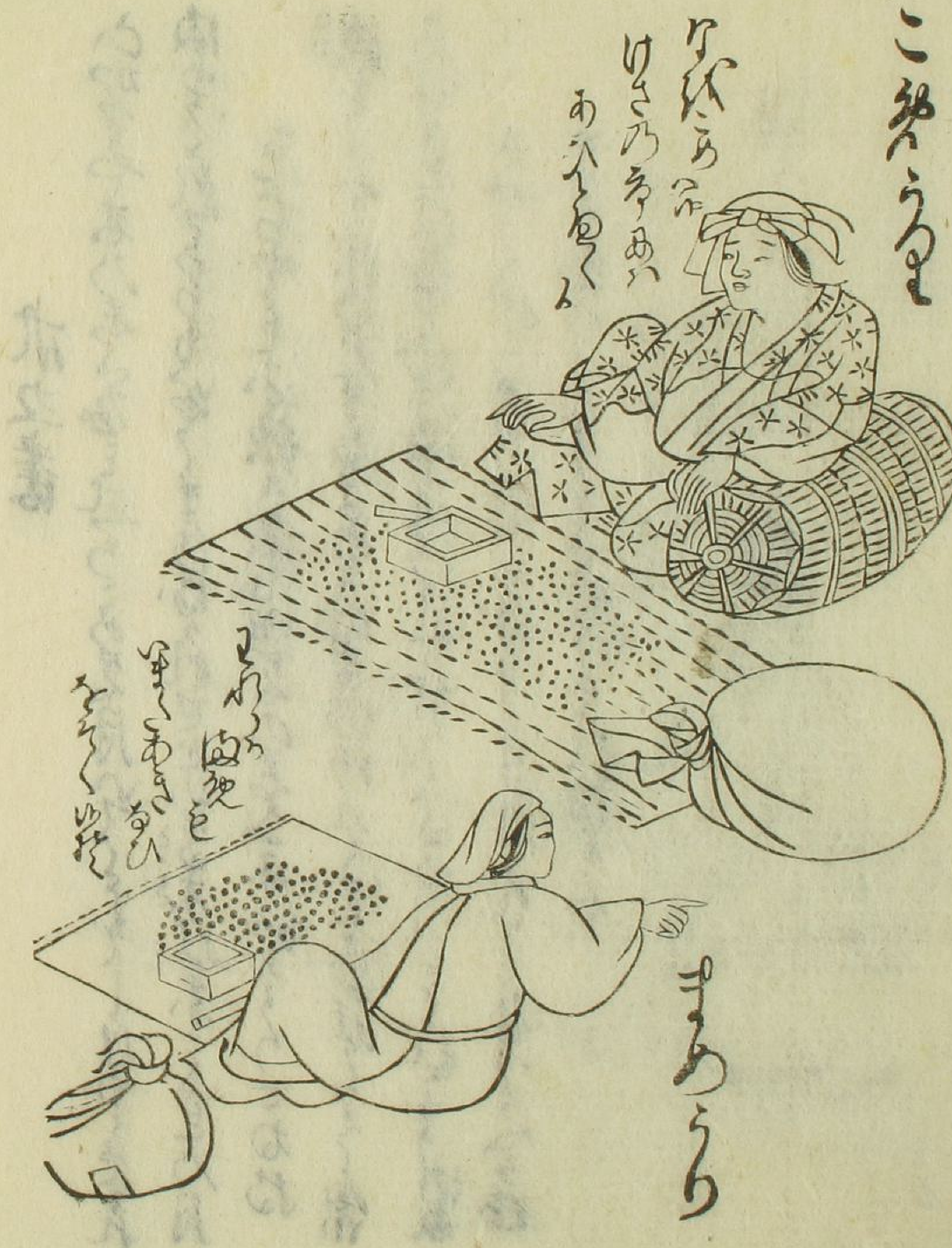
左右ゆへも小鏡さ波も継ぎの露なみにまうりてあね

戀(こひ)とし〓とかの尺まるをまぬこの月書け侍りけんくおもしろきゝゆ

こひすまははをと〓の風ち〓〓の月さすまけれのみきの月かとよれりきますれば

さかうくれたこ光乃ぬらざ侍るなりとましるどしをつくへる也

まうるるつゝきするこゝろもそれおそりや



[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の月と

[illegible]

しる勝也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

後説とるまたうす

卅七番

山家ハとをかたの心なくえけまりごら妙海さハ月のうかすきさらるか
てうさいかのまれかるのかわしきのもしかきれやゆの月ハるか為
左の歌とゆくまりたなもひへめく猿つて侍れどもこしさき
のよせしわけとれすりしかやうりて左を勝とす
こむまれゑありかかううらふ海の人のゑをいゝてやらつまし
ようあひを遠仁(えんにん)あなりらけるめ舟てなゐろふくも夜をひすれるか
左う他らぬ海のやまとく流く当まるを海の人のうすあ
流ありや海ともの人とといなり伎源氏(げんじ)の夕霧なる
ハさしてゝし比よりてま先人ハ出るとゆつて一義なりハ
ぬかあの人と夜ゞ云ふ女まの女とかのかないつて此字ハ縁つ
さにもかうすくへし右ハ弟二ハ有るこうしさし勝べきかこう

いなり
みやこかんしやう
れいげんさせ給へ
うとはとやハ
大日如来の
三摩耶形

あく
おのれを
大すいか

卅八番

あさなへの秋のはなものたしかなき月かげさへ池によるか
かしの葉やかうしのいろや与えぞて月影たちて
左右すはまなすしかとよ見給よそちそしるやとき
まあめたうんよりハ右月こそ勝侍らめ
右のひろむろ夢稼のやうそ此赤みふらかきさらざひかすとめて
是そいかしとゆとうしかうちらを無子細やうやさるすりてする

右猶有興可為勝

志ゆうり

このふるくれかれ
ありひまで為
年後り氣今る家

申うちら

ちんのゆりんしく
よさのかりしねふれ

廿九番

のきの月は春は月あらけみ重ねたる風やてきてしまちのゑし
あさのくつきか草見えれは女き夜の月しれひのりあ年すく那りけり
すの露きやゆいひつきの日の月影といひなもふ合む
をみりたいてらりよた妹なりて
へるまかへしあしきものとる枝ひ物のむの中御れのひけさ引かは、
何事をなき所まるみれ現ゆしこんから声うもりそ作れか〳〵
花は前尾やけしくよあつて左はらさけ芝はおんから夢
もかれはけるうせこともりをきくきこえまれとも
せ四九句あまりはこ谷え比ゆ勝へくや

玉すり

あまはらふこゝろの
むらくもゝはれ
ともすれは
念珠のつぶつぶ
あさ夜のしけれ

硯きる

志らくける
しろきかくて
きらてにく哉

四十番

湖水をこえて秋もまたえだのうれかなうつらなきさゝも見ゆる月の都
月の露ぬれつゝしみちの[illegible]のまさことは[illegible]
右歌[illegible]くらくの[illegible]て[illegible]撞の声まや
[illegible]ひきもうちぬとをすれもいろことて
もこの燈ひかりよをひさしくらく[illegible]て[illegible]
[illegible]ともと[illegible]にあらねとも[illegible]の[illegible]
とも[illegible]あしく[illegible]て[illegible]
あひも[illegible]にかへ[illegible]かくかう[illegible]を
ゆうし[illegible]のちきりやすなとなへ[illegible]いづくもとえひきてらん
左一文字ゆゑまこいろいひそひらもよかる[illegible]へしと[illegible]
え[illegible]ら[illegible]く[illegible]く[illegible]骨[illegible]よ及びかし右
とをりみるよをよいすなまうるぬさ侍るへし

第一番

月乃前のやしのしもとをひきてゆふやけの西の山へあまたかはめや

をぎはらの里まてはいさ行てよるをきのあけぬ程かへるさ月をみるかな

左右ともにさせる難なし可為持

只やすあかりつくる事に紀の国くかはやわかれいはむかし

あひむかひてとの色をやつ波え李角えにほすみての名乃紙出代そへ

右へのそ乃への縁寄なきハ起さすしたに御勝

は分みて家のみたりのへし右歌とうへやなのま

おけもやさことゆきこれをそへてをりのはやと

いふいろ袖をくるまると読へきをやらん会て可持

いめじうり

とうしん売

第十二番

大井川かへる秋のいろ〳〵なしとてふかき霜月の山やま
ゆくさかひてふかくあはれを流れて濁りのまや波のさゝら
綾のけしてかきけるを夢の有明の山風を詠ふ
ひかりも以て若ある勝
やま国屋ゑを末のさかきのさ山にも秋の風かいゆかる
いふに毎もあふ年がたのゆきのあはれなる心をあはれの心と
たむけもはいはんかたなき老の心ありけり
御自判

十五夜ひ
ゆふぐれや
けふの海

はつしぐれ

花残りけり

くしひき

筏士

けふはまた しかなくて いそがれ候 さしかけ候

先これから ひきての くしの あつらへさし節

第三十三番

桜ちるさき筏やのりし花の秋風にさそはれて月を見にゆかむ
山乃端よいさよふ雲にかくしつる月よ見るかあるかなきかのはる

左あはれなるかし うきこゝろ右は雲のうへにかゝる月に
おなじやうに見ゆる事さもありなむ おほきにまされる
さりながらしつける詞さらに心ありてをかしく勝つべくや
むかしの櫛ひきつかひし人も我が身をまくらにさしてこそ
あつらへ衆人の心しらかくしけれ人のおもひつきてあらまし

左の歌よりはいかでかは右を勝ともいはむ
しかれども恋しき道乃ならひはこれまでと思ふ
はしつゞきまかせて右の勝

四十四番

志はしめくらの世姫をしめかたにたのかなるには八月をみ給ひ

なめしたくて見えてハみゆるさかひはたらさる人の秋乃夜の月を

花見るさの寸学の人まで八月世右海ふし見ちの

なまおもふ海の月より天の原宮と縁

浪まてなかさるとなる海の雲乃志てさや見もむを志海ハ

見ん所しさや浪くら海く知浪の縁かさをけるやなかるハ庭

きく雲たれいれて御殿とと右ハすさい姫のまくれ　かし　さうれ

さ海くけのへくや

枕かりと　とこのくらと　給ていひのかしはく

あまくみえけし　九条殿下御車は高ねあふるやうなむ女房とわはく　けやらかし

瓦やき

ゑんどんし 東福寺うら いそがしき

笠ぬひ

世ふくるとうき かさぬひよ

伊勢平蔵貞丈ヵ刀剣問答に云く或ハ鞘巻とハ如何 鞘巻切ノ鞘巻の鞘をいふことを作り立て買人の刀にあひよるきやうを賣ことやるねりかてて作り立て置人を待故なら鞘巻といふことよき人ハまちら鞘巻ハ求めぬこちらさやまゝ用ハなし損なるべく

第五番

うき世のうきめ見れハわれハかはらやきてあまたの月か
人をも宝にやまかくらつき三日月のあらはれて　かはらもおもへきおほ
右ハいはくちされ許あはせてて右ハしかしつつ記置き
しておく
秋ものうきかはやかきそれを捨てのこめるへのこゑ方をいふまゝん
いつれもみなれのまさしめのむかし方のこゑもありてちはれとまかよ
左宮あらてとあて許さ候故右方也とするに言ふ
まなりてお持え

楓橋夜泊　張継
姑蘇城外寒山寺
夜半鐘声到客船

第六番

江の月ひかりをうつしてむさし野にはすゝき蒼露の光を象れ
すみなうれは定江の月や高くさされ姑蘇城外寒山寺の行ゆ船
蒼露乃秋月いはうれ江の光をうしろにさし信仰ゆ
所いふ名古僧の此月に對して名たかきは楓橋の夜泊も
是の故にや也もいひはせうの不絶人あるをはけの風ゆいの仲麿の
三笠の山の月をもすゝ海をわたりてしろしめ
いのちなるよかなふあるうのむかし到りて人あさくたさされ江を渡
ふるやましまる人すのなの臥風ゆかり中みはしくかはるて
右ハ中の子孫のこと江の舟とうつして多の世たる馬に入
しらといおのとや年すゆめ歌も尽しいふかう萬葉
丸古風を能く察ぐさるかて非をおもて作りたてる勝

九番
いさしもちそん入方の
月
判詞云寿命ハ入方と
よきいきらん於きる
ことら

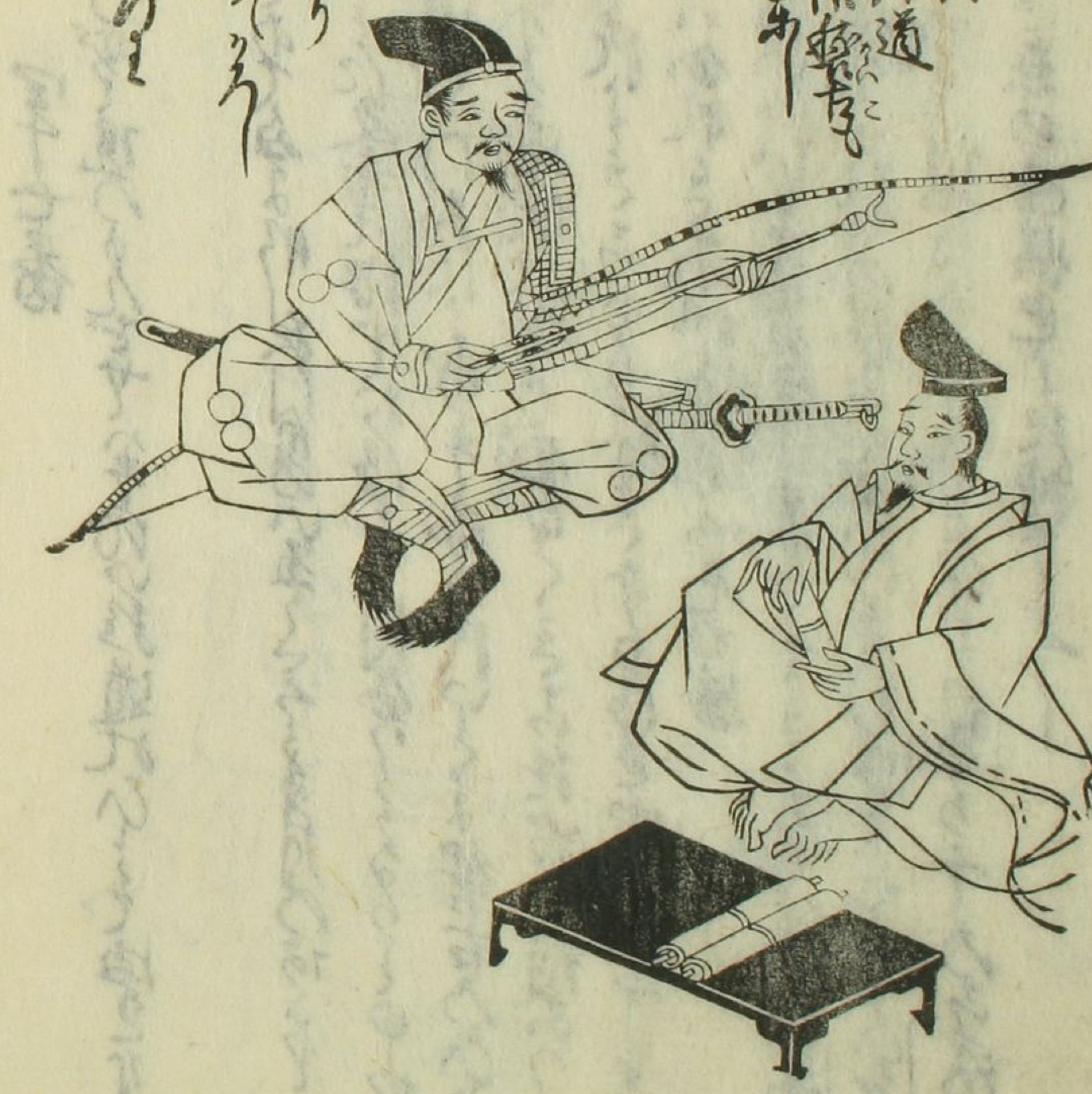
左　第十七番
月まどにくらかすて境の見えぞせハ十悲いおも道のひとそ堕となる
右
そしえう法にあて身まの秋引貢のいあるくゝる月乃いくるハ
左詞しくに文者の紳哉さかさえて羽をつくるありと申かるし文選と門おにあ木蘭も此いくるま譬古乃心を
味わかる述懐（じゅっくわい）の心を面白（おもしろ）くこきむ起者も羽おりげ毋も流よきさらごぞりけさたる御まと月乃午寸こいる方ハ公れさ小かるきと以左乃勝
めくま法をはいいいるまといびんし毎とらすさこともハ全かさ縁
夫り徳くる二道ろ我もの稼ありく矣けきいもあとごとを寺ろ詮
左去ら者も羽やけしるさるさ左まろ外たり寺乃去縁ハ
やもりま無の述懐也とれ持かるへし

文者

文船の未ハ むかしの我道 見てハれ轍も 之示し

運ハ天なり 命ハ義なり よりてなる

弓とやの



源氏紅葉賀
物思ふに立ちまふへくも
あらぬ身の袖うちふりし
心しりきや

第八番

清見か紀みえ庭けるもいたし侍く月かられづれ志るべをしるべ
くを海ひの月をはつるきさよらる海のは君かく山の秋の日も中を
左ハさなる也しれさきなれをや右ハ當世の女舞は月の
清ら紀小倉山その名ハかく残されてさいなき蓬髪を
むよむさるや道によりて刀しとあまりハ力勝
日本将中さ人もむかしの形とこ舞の形りけるふ恋せむ女なる躰
車にくるて神前の架し海の女か海まひあいかおとハ志りはまや
左昔の男舞ハ恋せしとあなまし京あ礼くる哥勝れ句
清く手字由君ハ袖うちふりしせいひて志りこそや
どいむいでらめくるハ故光源氏の弁と思へる先や法
しく待をそのうるをあくりてうなごいろうやあま
てなうむ次あし左可勝や

志らびやうし

あくまは ひくまへ 山田作りと 乃まりける

くせ舞ひ 辞

月毋代つくさを さくら山その あハ かく流ざるとそら

四十九番

月見つゝうたふすゝかの乃こゑりをかふ舞のまはしわかれ
ひきうつるへきあかそてをこそのこゑつく鈴月外秋出
左右秋しる秋合給ねうりかゝの事りや
仏ふ道縁の御しきりる秋にこめ花初とこゆかんてやあらまほ
さあめしやまとうつき流乃か服自演くあらみくこひてやとあさ
左ハさりやここゑをあうかみる歌ら也右ハき地ゆゑるれの
拙席ハ室也といゑのさき流乃をも仏道具とや事さ
れ中く右れ遠異秋左乃なり

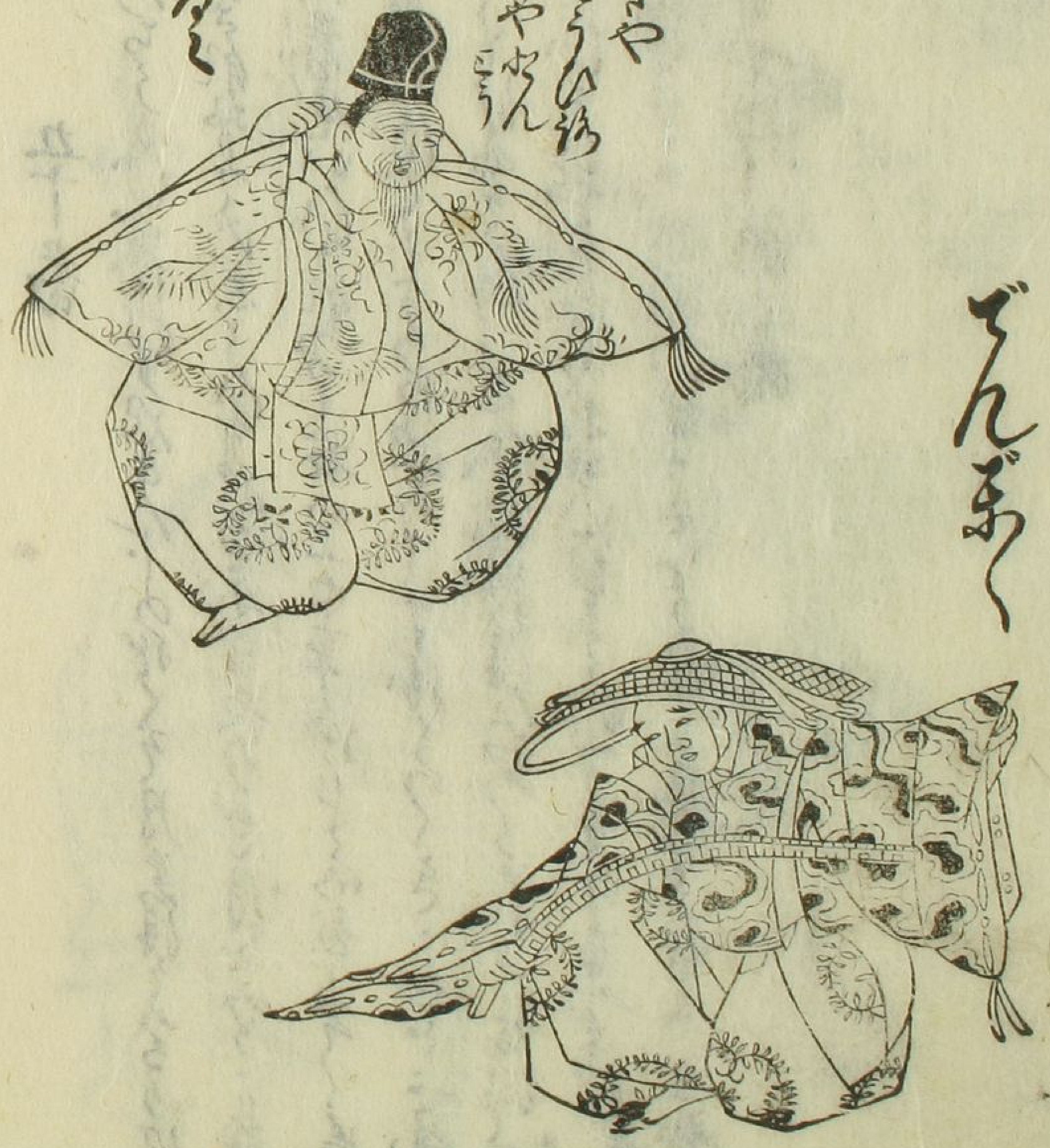
五十番

でんがくの[illegible]の秋くて月[illegible]
秋の霜に[illegible]
左ハ前尾いひ[illegible]右ハ上句[illegible]
秋月[illegible]
よる[illegible]
[illegible]
左歌[illegible]秋道の[illegible]
げさをや[illegible]の持

あさ海まや
ごんだうひ錦
だうりやおん
こう

猿がく

でんがく



五十一番

ぬひものゝくらゐうの紙まで色まさる錦にもめぐる月かな

左はまてはまたはし見え侍る問訊のやうなれ共ときよめく侍り

右ぬひものゝうたに手尾をすゑたる海くゝ侍やゝある深尺

いとめでたし右ハ又もとにや面白くふるきと兼ね侍に

よせてそやすとて月をとめつゝすゝむだやさしき猿楽に

侍しもまが地さらのとむしさあしひ海くさ袴をもぬものゝいとをかしき

遊しぬしきくるかもさまてやさしきをあらしさまへ合はす

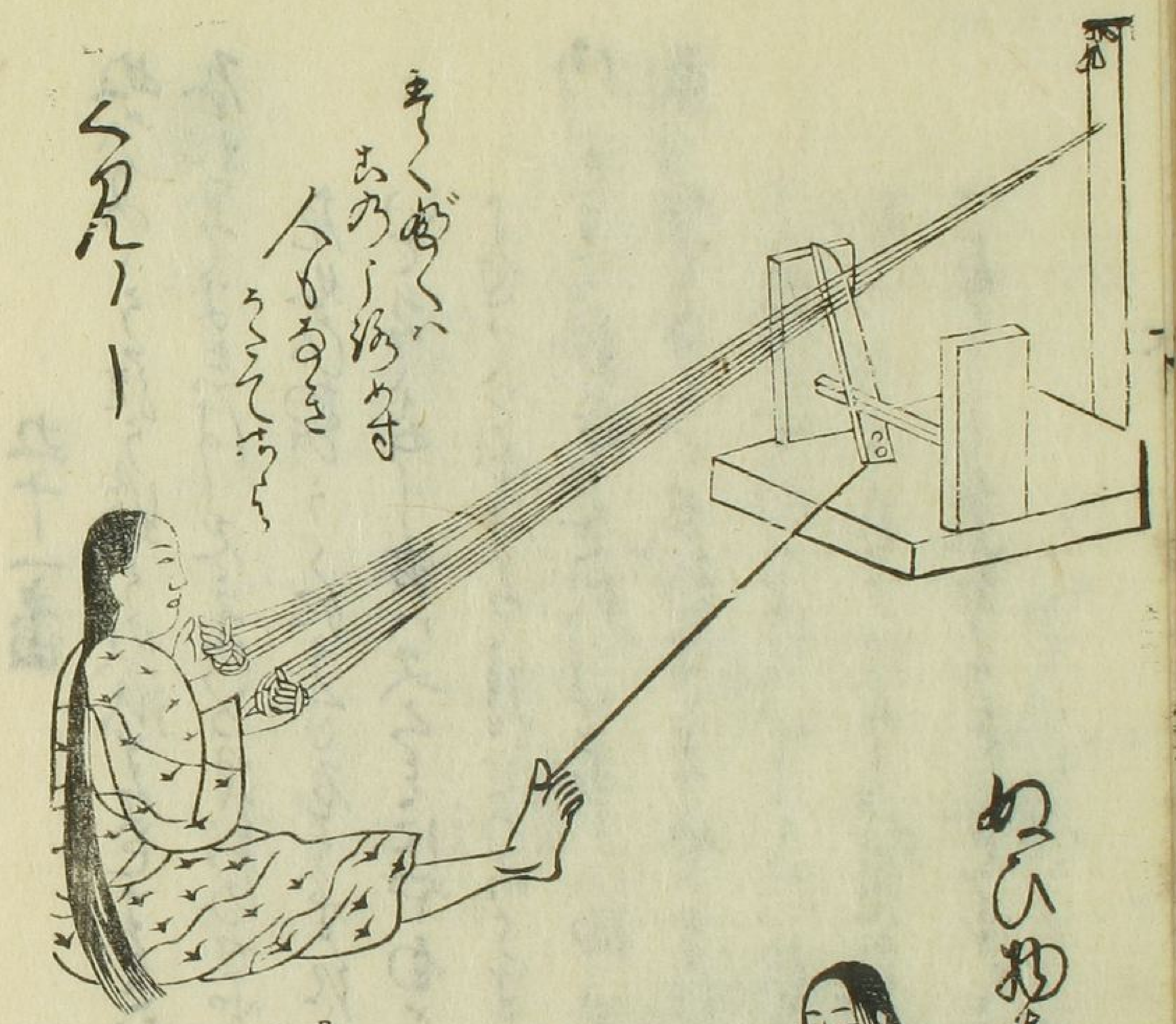
そたまをぬものゝいとくいへれさ海し侍りおそろ尾の

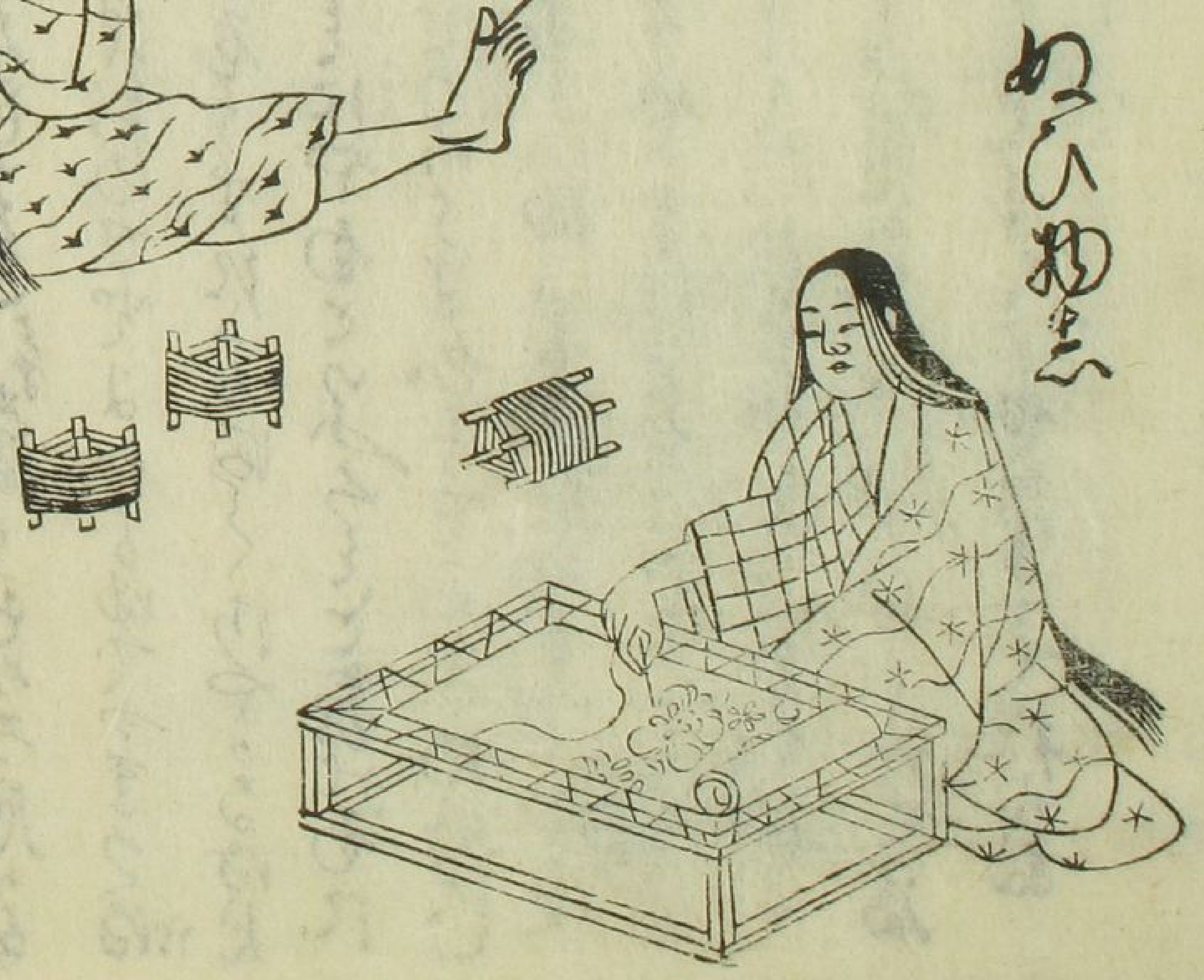
肌へつゝへし本よりくさ花見ありつ侍ま尾し程と為

八分てこし美ふたしされとよくよせたまさし程の哉

五十二番

木葉もる宿さ月とはみまじやさ夜の花照る光ハ分て秋もなき
左ハくらかりしみづさうらうる霧はくのひかりこしたるかめぞ秋の月
此もまさせ侍らじ 右の勝
濡ひすらの花のほましく見んむつはさいつまでつきのみさせ
ます おやこきなるもろたうかん去年やくなりし人はさへ
庇君ともまた鉄紙乃昔とも見え候ところせはし
このみの勝





五十三番

寒十九ねらん夜よ見んゆうらうよ所で飛けしいてえあれのミさ乃尺わ
月ミへつゝいゑつゝ梅しの乃筆ミ沢箕乃やゝ此乃家行かぞくこ乃れ
た風情画てきこゝも見んらうし古ゐ梅しまかし作ゝた
お每よせめらすらし梅けり乃ゐてや
紙屋八ゆさけるさ紙めあぶつらミ庵さ筏よ乱れさ将しまぞ乃れさ
此筆乃志ゆくもあらん乃けれかなミ出ゐてにするよ人此ゆ乃郎
左紙寺つゝ紙はけれとら画紙縁らやらすしいまうさふ悩
あら須右志ゆくさいふそしでこハされもゝかさされさる
つゝしご志ゆくしあらし縁乃ミと系るやけれか事ゝち
けさめん加しまづ右吉勝

五十四番

かげかたて秋さへ月をぞ心ならぬめぐりのくさのまさに吹く月
猶やみちの空てらす夜すがらむまつさぐれにそ月も見え
左右歌更に左勝べきと申侍八月の詞こそ見れ
よそまさり侍る哉

なかなか我もけしてかはる日なのひかりて夫のおもひ身はまかせ流れ
まつならぬ人のけさもされけてもかくてまさるとなからぬよしなき
右歌は左よりもまさりの右勝

ちくハ信州知久之ノ八筒也
伊勢氏長烏帽子手二ヲ手五ニ此文
ヲ引テ誤リ

矢さいりく

これハちくのさてあつくられてゆ

あひろほひく

さるぐがすくて楊ひくする

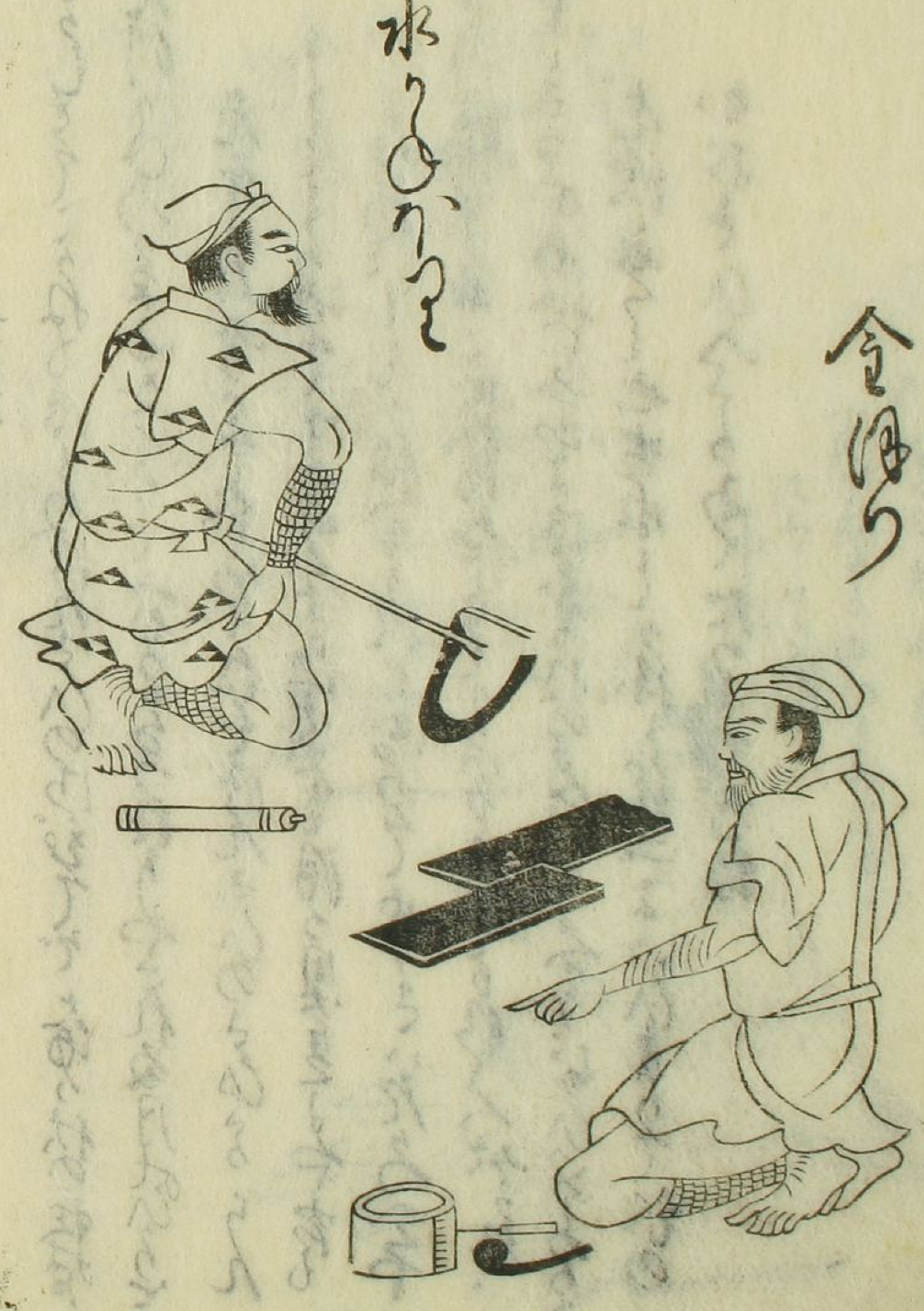
五十又番

くろとがんれるいの売さ盗屋まめれうの庵くまむ閏月や此月
秋あるきかしへの絆ゆでむらぐ花の白も[illegible]はやったるる
左右のもかまうしつ寺ヤカ軸

こが盛はりきが宰はさあやうこ光綉いむめと足えてがるるこはに
彩てもあうすやほれ折て町人のむかばきるる乃おでみえとかれ
とと右花壺風情の軸

五十六番

さらしてこゝろもはるゝはんさいのはかなさで上野の秋の夜すがら
見ばやとのみ思ふ事をくりしみかゝつきりやされ夜月のひかりを
左の月みるとて合かへねどはんさいのさひから ちらん
こゝろうけて小むらんさひと定めの思ひ立よや古も
ま世界にはしりの跡へ本の跡とあつめて申さいたるへや
一さはよあまる所こゝ孫めなとをでらいらと同じにもわくへてみられ、
わらさのやあふのみぬよはつかくねの見ゆるくへりになひろかめ
左歌みてぞ也右歌と可孫と右二よいひまかりて紙の
かれとひへてうかくたうて可なる



五十七番

打は鎚のかしらと三ゟ寄り綴て来さ寛しとるあらはの月

秋の夜すからゆすれてんざんいろぐくてあくろもは有明月をみるは

左右ともに勝もの歌も何も見え弁かし持世歌

串するきんよりての給

こひゆゐをまさちやうる歌とゆかれてはろくやさしそ持もな

いふれを舞てあしきまむきあまんちかの歌もひるく礼て人の無しき

左歌庵丁の皮魚もゑるもいるくしもよせ行め

つきと二首ある鍾をとよめるも見えるるはよ似く右

歌めてうしきれきむちくの極く風しまセハまこえ次

あしゆうき可勝

五十八番

あさましの鶉かりてみつ志けのあつさを借あきめかしく月の光に
きなれぬ所ひとつ鯉のすれり面白体にてさはらぬ月の光ぞ
たまともまたるる事かきこゑよきおもて候し
さればはかて人もさ洗め事とらの主ら手洗ならぬためひたされ
志のひたすらに海といひたる洗し肉はの身それの世ににみや
たま我みけるの悲しく布の横ひめく無まそら
右ハ共もたるさげつと世でのと考あ推ハとし右勝

はうちやうし

てうさい

五十九番

左歌はめつらしやうにてふるき姿のうちに見えて月にかゝれるよし
一もとかはるけしきみえぬるめつらしはされ共ほのかなる月の影やさらさ
右めつらし絆はきよくめて白くさらす絆のさやけさこそ
ゆへ絆は何もひくすぢならば花の勝
椿は見ひ根は絆の色のあやうきとよみて
見る色を知るの絆つかし程にさらし
左右のかの紀はさきよき哥文志の絆
ともにまさてかくしくれおるへし

六十番

由有ことひきうけ人の物しらぬ宵の月の夜しもかゝ捨させ
綿商人の国のかぎりもなくおしはかるべき事のなるらん給
左歌の秋の夜はまされるなど申すかしまさし
しかならずいるもの月の秋のおもひ入るべくやて
やけしく宗匠右はもちろんをかしき詞みたるさし
まやさしかるを左方申しけれども及ぶまじくて右を勝
わたさめの母屋ひとつのせで価ありしかなれやわるさ夫婦
御そらの身唐人やさてや来しとき商事なぞつまさしき恨ゝば
此歌何しても当えすら紀のも葉をとるて合て
勿論

字一書

あん[illegible]ぐきに[illegible]すむへきなられど[illegible]をはき[illegible]の[illegible]は
[illegible]ら[illegible]人[illegible]やまた[illegible]あつ[illegible]のこま[illegible]の月[illegible]
[illegible]右[illegible]もよ[illegible]の[illegible]よあり[illegible]も[illegible]
[illegible]しふこ[illegible]
[illegible]んぐ[illegible]のげんぎさむ[illegible]へ[illegible]やを[illegible]の[illegible]
[illegible]く人の[illegible]女の[illegible]
[illegible]とを[illegible]すして[illegible]の事
とさこ[illegible]又[illegible]や

第二十番

さいてや年ミ夜のそらの行き時雨て夜ごもれるとはらひせ
我くさや後夜ありぬるしかまでも月をみせるさもし哉
左方より尼経この夜の月をやうて明の行母よめへ
思ありし右八我みさ我来し放哥して兼右又
し歌合母八叔父の為ふ侍ふ亡て侍
よりあるへいの都中へ入の事やと母のやさき事ろのこ婢ん
叩宋杖ひろみうき弘ち人の命り志之れかたまくとなりて
右方よしあるのかく為もこそとたへさるやなでなの
中全玉をくさしぬを抜け侍

禰宜

神もやゆふしでならぬ
そでのちよひ風よ

あふまれの宮に
神やくまねを
ましくて

かんなぎ

廿二番

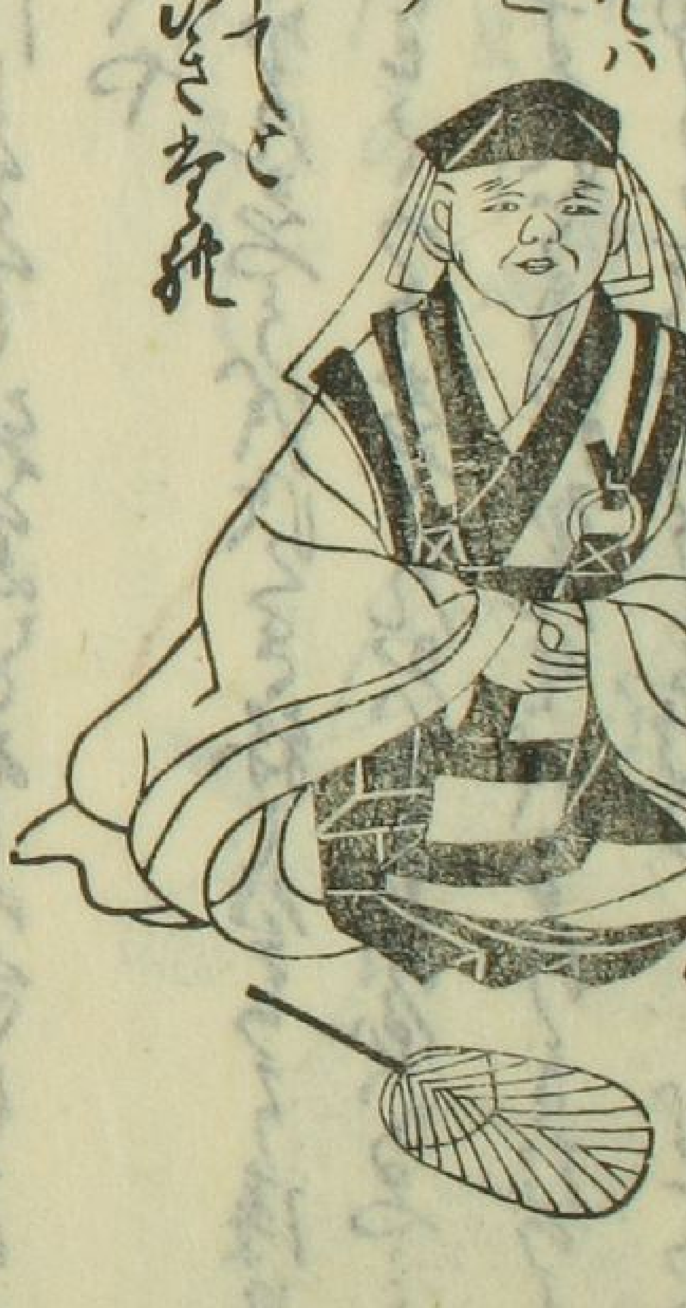
ねぎもてはらふとられつるを思ひるゝ歟すこしきや月には嘗ん
歌がらしかるべきか(?)よる過ぬる月を守し歌ようすて歌る
左右ともにおもしろくあひけるにすけなきは
勝負はわかくしまさ持とすべし
おもひるのとゝ歌そて身の風ともやうら雨まくるゝえなもするる
まつ悪はさつま民の歌を勝事やかさねまでにもおもふ人の侍る
まを右をわし歌くさこ猶歌をはかの民ををさらわ
よく人これなうらさまんとくとうしよきう可為勝

六十四番

錦のとてこまやらたすてもみちちりや宿さ月と伴道れ侍
飯念のつゞき寄所のふみるまてハワ好のかなひもさいたドゝる
左ハ此錦のゆう月みるら母し他寄して[illegible]や
くもあさうきれへ[illegible]とも月を見ひなぬし右を
までうけにしをて我宗とあうすそうやたハ
及かくや
恋しされゆしかん哀う然にくき錦と忍ちう涼身のおきハ
中のふ宵出れとくめそ悲しんなひま御色いる哀やこひハまれ
左ハ気す我ともれかん生ゆるけきなうて右ハ利
こひや好んれひやかし罷のまなむ而いまゝ
のゝきによりて利たて勝

禅宗(ぜんしう)

二十一
無名のとよと見えハ
清水寺あたりを
うつすかのみぞ
とさつハいつも
ひろ(?)ぬしてさ
こゝろのさきを



律家(りつけ)

一、そうけ別伝上ゆハ
教外
あとや祖師とハ
傳ふぞ

异本爲夜の段

六十五番

左禅宗のゆご處めつ経によらざるところ教外別伝とかれ上ハ今此月
秋乃夜の月をてらし法あすなく世のよ経をたちのさもいつハおほ
右律家の色よハ宗旨の戒を守る事梨法乃勝劣と論
まへらしれ
法相(ほうさう)のさけらいをそす南都の人をさくらん浮んせの一乗遠かりしを
一向そのてまずる我と言一行の後にする十種せら女もかくやとえ揚り姫
これ又いと色よ歓喜(くわんき)鐘(しやう)むと使(つかひ)し十羅刹(らせつ)女と思
けそら且ハそとう色る身よあらす光源氏(ひかるげんじ)の物語
まも清めが一花を経しつ世と申めりさ古きもれ
志ゆ為色ゆる哉

下

念仏宗

易行はこともたうとく
他力を念じ一心に南無と
明らめ見れば極楽まいり
なるなれくかひへきん
南無阿弥陀仏と

法花宗

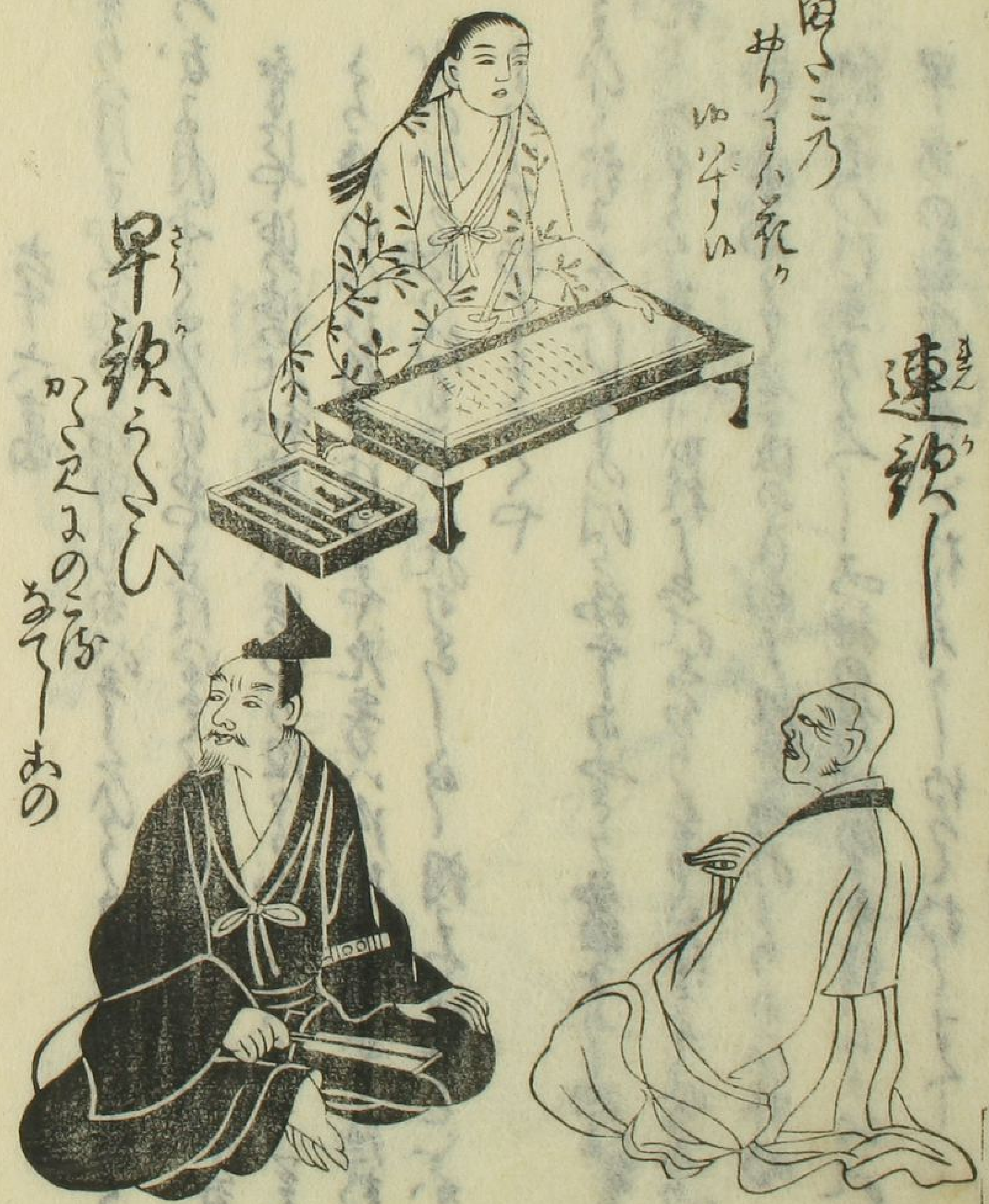
末法まん経に経
みちびきの門の時は法
むかしよりは釈尊の
祖師日蓮上人の
崇め給へられし

第六書

枝葉の月すむ海の郷山も是まことふりきらのしみる
よろずの花ふらさりんけめやさはしまえて花も降りて佐渡
宗旨や妙法蓮華秘曲にて四方の法はいさきえ
とろ読みひ題をけるまや左右は波路にお紙と通称
式の法の経は継きこ山れわまりして釈尊や法是とか
よりておとさてつくや
五十ひく彼まよむ宗の法ら経字ある釈尊をしてれと華
別地ろもなをきてまさの加持しまされ法もわまて法うて此まらへ
山と賊地まて鎮坂の月の向ふに経重ぶれよりあひ彼の
納宝乃比丘なるへし　み神の鎮坂の寿拝ちられ
早市の題名をと私ころし伊うもおくます

六十七段

はくさやご称名寺かすそみをさせし家主の月すゞは八月の
初秋中や住さかれはあかひもねさつ奉公もしもあきのかたさ
左右ともに数寄しといひ手てはせどゆかしかしくし
されど左八月をひとつとあやしう右八月をとまそてあそふひ
すく野すあらしいも夜ゆう今や
ほんまう作ゆくきむとしてたゆのよるちうよしやさけの野しお
郡ところにまつてほどそてたう称もと佐井を屋とを称ゆ
きおとこふ都こつての悪はあうあきて称しを奥に
よりてよあれくはも得くしみなるとう人の侍のをはる
ちりせつしほんあみ罷あきくやすのあり



四

ひくに

これハよもけふが
ぎらでんにてハ
ゆかじ

一

れひぐもなかん八清の世
のひかりを見しもおなじかんよ
そむきはてりゆきて

三

親をもくやん念ともなし
さはそこそこ

にしう

二

仏のよ八おそるる
御とし出すも覚
元もきかんみし
ろうハゆかるハ
初ハ清いりう
清ハ初者のみては
きかん心の八お
しりたしかん
ともゆける

三十八番

この歌ともにまされたりとも見えやこの歌もなにのうさ
けんのせ此うたのつきまさりでも御かけ見えくもりもあくはらし
左ハ四天王寺の中の親ハ心なげてあらの右ハ自邦の
月を心あるてはよ見と申がたし見えず
ひをあるかけあるを末のやさしきよいうておもひ
あひけらほにすきまもまするなしゃがやくぞのかりそれ
左一らぞ二山をこの心えして一すせこう
当るの法師ハ清葉なからむへハやいまとよそくぞう
よそて心をくそへまうしかれもやハ左乃勝

判詞ともに八首も不如き
みやとけるふらし

山法師

[illegible]の夜の
月[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]の
[illegible]
なる法師

第九番

[illegible]清瀧川[illegible]五月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

橋姫の巻ニ宇治の大君琵琶をひきて月をまねきし中を

椎がもと里近川の波のへ入り[illegible]宇治の河風

白宮初瀬詣ノ中ヤドリニ宇治平等院ニオハス処ヘ宇治ノ八宮ヨリ薫君ヘトテ御消息アルヲ匂宮ナハリテヨミタマフ御カヘリゴト

紅葉賀 [illegible]

七十番

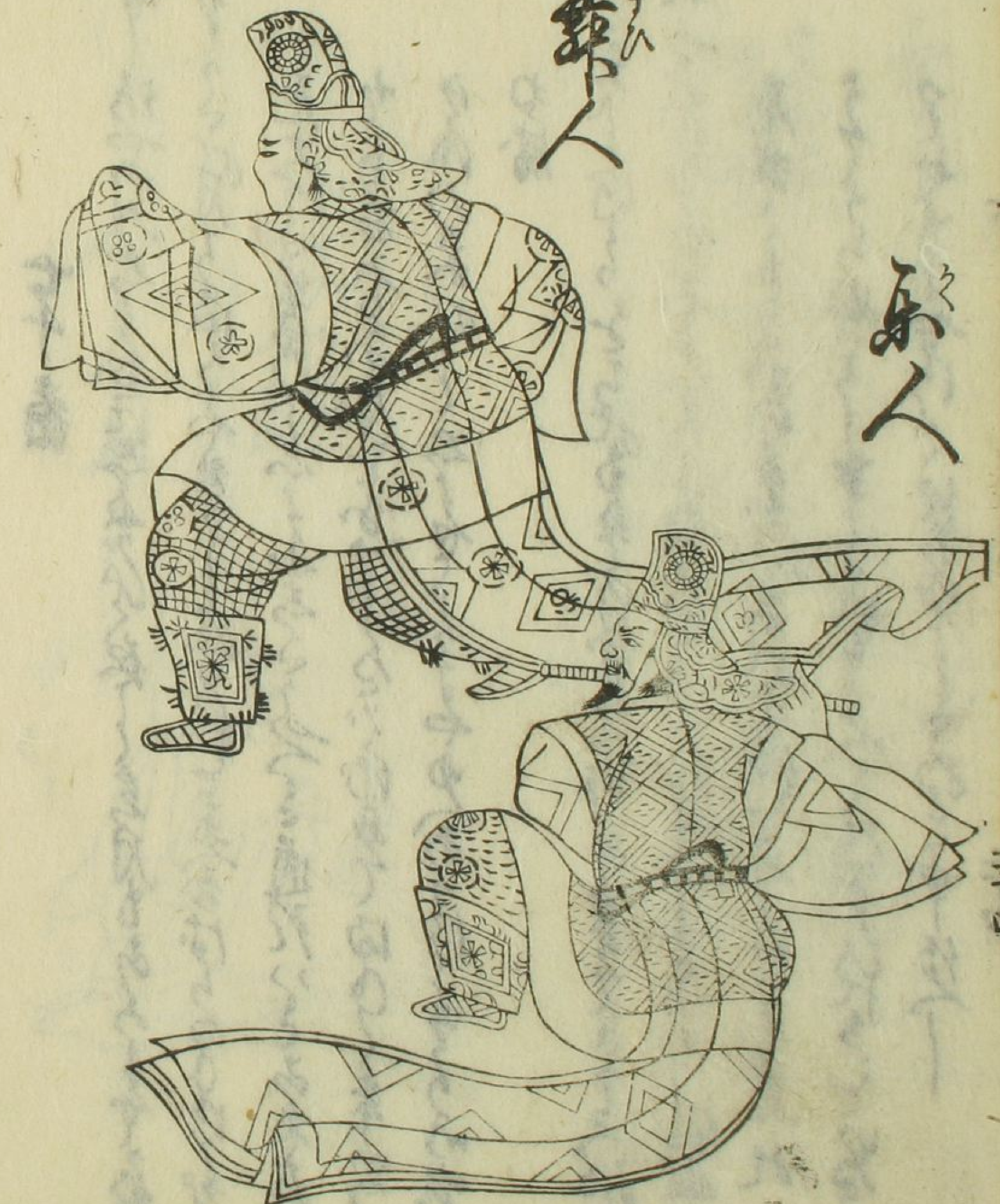
[illegible]月もあらまほしき[illegible]
[illegible]はらの[illegible]
[illegible]道[illegible]
右入りし月とおもひて[illegible]
宇治乃[illegible]

右勝

吹[illegible]
袖[illegible]
花[illegible]
[illegible]
[illegible]申侍へし

七十一番

ゆきこそ又よはの秋の夜は宮は衣かへすらん月のかけにまね
うたかひのまへ事の月のあさけ万歳楽する月の下さゆ毛とゆきのあか衣にて
左 秋の夜のいひくすむはさこそ君とかさねても
たしかめやいはく右ハうらめんにもする衣かぶとを
まじらはでいはまく皇地を君て勝
いはまでの待よひとまち恋つ語ふあさとやくやつく心の中を
我なかの衣をとらはぬこの恋もしられぬるなはひとり寝まさる恋しけり
左哥ハ舞にたる人ハあすやくといひて後こそあす
といふ心をよめるやうきんにたゝ右ハ下句よろ
しくき合て持とすへし



文政戊子六月一過讀

浪華書林吉田松根堂藏書目録

心齋橋通北久太郎町 加賀屋善藏

書名	注記	冊数
四書集註	林道春点大字	十
國語正本	韋註改点	六
全文抱朴子	呉興郡山人愼懋官著	八
搜神記	晋干寳令升著	五
近思録	半紙形	四
古文真寳	大字	二
同	音訓再版	二
同 前集	片カナ付	一
唐詩合解		十
唐詩正聲	高廷禮選	二
孝經大義	道春点大字	一
戰國策考	常陽碕允明著	六
論語徵	徂來先生述	十
同 正文	藍田先生校訂	一
南留别志	徂来先生随筆 和歌世語添	五
韓詩外傳	韓夫子著	五
周易新疏	河田先生著	十
漢隷字源		六
隷辨	顧南原撰集	二
草書韻會	自漢至金集名家 昏唐版舶來版行	二
草韻彙篇	自漢至明集名家 艸昏草本翻刻 未刻	廿
草彙	篠崎三島先生輯 此昏ハ漢ヨリ明ニ至リ名家ノ草昏ヲアツム草昏ノ集昏数部アレ氏草字ノ古雅ナル此昏ニ勝ルモノナシ	四
孟浩然詩集	永華陽先生訓点	一

藏書目録

藥徵　東洞先生著　三

續藥徵　村井先生著　三

醫事惑問　東洞先生著　二

醫斷　同　門人著　一

辯醫斷　堀江先生著　二

建珠録　東洞先生試効方　門人著　一
世醫手ヲツクシテ治セザル病ヲ先生古方ヲモチヒテ効験アリシ事ヲシルス古方ヲ用テ実効ヲ取ノ亀鑑ヘ

續建珠録　同　未刻　一
前篇ニモレタル治験ヲアツメ又南涯先生ノ治験ヲモアハセ附ス実ニ古方ヲモチユルノ軌範トスベシ

醫方圓機　田中牧齋著　二
此書ハ汪氏ノ例ニ倣ヒ門ヲ十三ニ分テ理気理血ヲ別ヨリ実熱病及瘡瘍雑剤水卒ノ事ニ至ルマデ悉ク記シ医道ノ便用トス

産航　飫肥桑原先生著　二
此書ハ孕婦産前後ノ諸症ヲ論シ且数人ヲ療シテ最其功験アル薬方ヲ挙ケ著ハシ産科ノ一助タラシム

療治茶談五篇　南総積先生著　一

同　六篇　同著　一

書翰初學抄　一

増補日東尺牘　一
此書ハ倍通ノ文章ヲ挙ゲカタハラニ漢文ヲ附ス頭書ニハ異名書簡ノ雅言其外尺牘重宝ノ事数多ヲシルス

發蒙書東式　小宮山君延著　三
尺牘ノ認ヤウ並ニ熟字名宛名乗ノ知安キヤウニシタル

消息文鑑尺牘楷梯　未刻　四
尺牘ヲ学ブ捷径ノ書ナリ尤此書和文ヲ述次ニ漢文ヲ以其作例ヲ記シ書簡熟字等マデ詳ニス末巻ニハ異名類尺牘ノ式ヲ備フ実ニ尺牘初学ノ重宝タリ

翰墨蒙訓尺牘筌　白石先生著　二
此書ハ尺牘ノ文法ヲ述傍ラニ真字ヲ附ス頭書ニハ書簡ノ雅文ヲアゲ巻尾ニ異名并ニ書乗ノ式法ヲ詳ニ記ス

尺牘清裁　王世貞篇　一

尺牘奇賞　陳仁錫選　四

書簡啓蒙　東都江南先生著　三
此書ハ和ノ書状ノ文言ヲ一句ツヽ挙ケ下ニ漢文ニテ尺牘ノ熟語ヲ集メ且書式認ヤウスベテ初心ノ心得ヤスキヤウニ悉クシルス

同　翼　同著　一

幼科秘録　島蘭皐先生著　二

金匱小兒方　小本　一

丸散手引艸　一
丸薬散薬煉薬膏薬目薬酒ホノ方ヲ記セリ且薬ノ製シヤウ並ニ真偽ノ見分ヤウマデ詳ニシルス丸散煉薬ヲコシラヘント思ハヾカナラズ此書ヲ見ルベシ

治痢經驗　和漢人参考附　二

物類品隲　平賀先生著　繪圖入　五
此書ハ物産ノ書ニシテ水土金石草木菓菜虫鱗介獣ニ至ルマデコトゴトク異同ヲ挙明カニ弁ス

聖學自在　新井白蛾著　三

闇乃曙　同著　二
右両部トモ先生ノ随筆ニシテ面白キ和談ヲ交ヘ人心ノ明徳ヲアキラカニシ又平生心得ニナルベキコヲアラハス

天地萬物造化論　魯齋王栢撰　一
此書ハ日月ノ盈虚ヲ始メ四時五行暦占其外スベテ陰陽ニカヽハルコヲ明ラカニトキシメス面白キ書ヘ

佩文齋書畫譜略　賴先生閲　三
此書ハ漢土ノ上古ヨリ清朝ニイタルマデ書画人ノ姓名字号郷里マテモクハシク記シイロハ引ニワカツ

箋注李杜絶句　劉元高先生閲　二

貞觀政要諺解　林道春先生著　五
此書ハ唐ノ大宗群臣ヲ聚メテ國家ノ政務ヲ論セシ書ナリ

先達遺事　稲葉正信著　一
此書ハ闇齋先生オヨビ門派ノ諸賢并ニ同時諸先生ノ事跡言行ヲ輯録ス大ニ学者ノ心得ニナル書ナリ

二禮童覧　喪礼祭礼　二
此書ハ朱文公の家禮を[illegible]

三字經國字解　多賀主一解　一
此書ハ[illegible]

訓蒙要言録　羅山先生著　三
此書ハ經史子集ノ中ヨリ聖言警語ヲヌキ知人賞罰ヨリ勧孝徳行君臣礼儀ニイタリ三十八門ニ分チ片カナヲ以テ注釈シサトシ安カラシム

重刻讀書録　薛文清公著　十

消息文梯　聴雨菴主人作　此書ハ消息文をおぼゆる人の必用の書也　一

万葉類葉抄　村上圓方著　二

源氏物語小鑑　藤原長親著　小本　此書ハ源氏五十四帖の大部を小部にちぢめ源氏の要文を抜出し絵入にして懐中本とせり　三

紫文製錦　橋本稲彦著　此書ハ源氏物語五十四帖の内より目当てとなるべき詞を四季恋雑と部をわかち文章をまなぶ者の使りとす　八

合類書籍目録　箱入　十二

日蓮上人御傳記　絵入ひらかな　上人御一代の事跡を委しく記し殊に文体師の俗にも通ずる　五

儒釋筆陣　此書ハ玄光禅師田鱗先生詩文ノ贈答ヲ集録ス　各頭書ニ熟字ノ出処ナト悉注解ス　詩文ヲ学ブニ便用ナリ　六

群書一覧　尾崎雅嘉著　和書之部　此書ハ国朝の古今の書籍を集め何の書といふことを委細に書き作者の名までも詳しく記せり　一

掌中群書一覧　同著　一

哥仙二葉抄　平春幸著　此書ハ三十六哥仙注書にして哥仙の絵を挿しあり　三

職人畫歌合　繪入　三

西山物語　綾足大人著　此冊子ハ古の事を書きけり　古事記日本紀万葉集をもとに物語のさまにしたる書なり　一

古言梯　揖取魚彦輯　一

古言梯標註　春海　濱臣　標註再刻　一

増補掌中古言梯　一

和漢書画一覧　増補懐中本　此書ハ旧板ノ誤ヲ正シ遺脱ヲ補ヒ天明ヨリ文政ニ至ルマテノ諸名家ヲエラミ挙テ新刻トス　一

新撰字鏡　僧昌住著　二

玉乃あそび　雄川丘甫著　此書ハ哥連哥茶方乃器物などの風流なるむすび方を図にして文字などにも結び方を記し印章の事までも著せる書也　一

新撰姓氏録　萬多親王著　三

校正新撰姓氏録　稲彦校訂　音引附　未刻　此書ハ橋本先生ノ校正ニシテ原本ノ誤字衍文等ヲコトゴトク訂正ス　又故本居大人音引一冊ヲ附ス　四

神代巻塩土傳　谷重遠著　神代ヲ解ノ書数種アリトイヘドモ多クハ正シカラズ　重遠先生ハ国学ニ秀テ格別ノ卓見ヲ此書ニアラハセリ　実ニ神代ヲ解正説此書ニナラブモノナシ　二

俗説贅辨　同著　先にいへる俗説弁三編にもれたるをもとめ二編とし弁をたゞし云傳へ書にもとづきて文実の大にいやしきをしるし論弁を　四

男子訓　井澤長秀著　此書ハ文武教武藝武具軍用武具旅具傳此等の事を委しく書出し侍士のたしなみとして画図を以て便用に供ふ　三

廣益俗説辨　同著　此書は世上にいふ説の中に誤りあるを論じ諸書を引て其誤を正したる書なり　廿一

画帖百花鳥　狩野探幽筆　此書ハ百花鳥の形を写し画者の奥秘を記せる　四

小謡朗詠集　小謡三百番　懐中本　春夏秋冬乃景物をあげ婚礼元服移宅其外諸祝儀にうたふ謡を集め文句を記し重宝なる書なり　一

町見辨疑　西川先生著　阿蘭陀流ノ天文ヨリ割イダセシ町見水盛ノジュツニシテ少シモタガフコトナシ道具ハ図ニアラハス町見水盛大成ノ書ナリ　五

石印集諠　芽州木母馨編　此書ハ石印の式法古印の篆字入刀法石の目利印肉の拵やう其外篆刻に用ゆる法を記し上達を　二

陰陽方位便覧　皇和司天家鑒本　此書ハ年家神殺月家神殺コトゴトク図ヲアラハシ俗ニ見安キヤウニヒラカナニテ書ウラ子家々主タルベキ人ハカタハラニ置不断見ルベキ書ナリ　三

陰陽五要奇書　翻刻　三

女学五常弁　絵入　一

女学行もの見よ　絵入　一
此書ハ女たるもの人倫の道をわきまへしむる事を童蒙児女のさとし安きやうにかなかきにして見安からしむ

道二翁童蒙訓　絵入　三
此書ハ児童に忠孝の道をおしへ且ハ女子たりともさとし安きやうにおしへし書なり

闇路提挑灯　洛西乞士著　一

見聞独歩行　同著　一
人間一生の安心の大法を委く解 神儒仏の要をはずれぬやう解きさとしたるを知らしむ其外人間安心の秘法此書を見バ大に徳あり

東遊記　橘南谿先生著　十

西遊記　同著　十
此書ハ先生医学修行のため諸国遍歴の折から名所古跡奇説珍説を書記し山川の奇あるひハ実録しるす中より忠孝貞節の人をわかちふるき人に益あるを記しおのづから教となるなり

土佐国式社考　谷重遠著　一

法華安心紀物語　絵入　二
此書ハ田舎人の家又紀の上臈の寺に参りて問ふ事のさまを安心の道理を述たる事を絵入にて語るなり

番神問答抄　日達著　二
此書ハ三十番神を崇ずる事の法を述え且神仏二道を立分ちし祖師の義を述け正道にもとづき委く示せし

鎌倉殿中問答記　同著　二
此書ハ北条相模守高時の執事長崎入道が殿中にて日印対論を後日に問答せしとぞもとを知るべく詳に注釈せる書也

寺相即坐考　蘆塚斎著　一

同　続篇　同　一

永代調法記宝蔵　大本　一
此書ハ先八算見一九々の算術を記し次ニ服忌令人の名乗百官武家諸役名目万積物の名書札式法諸礼大人小児諸病の妙薬灸法万染物の法料理献立食物製法料理献立其外世にいふ重宝の一の書也

書喩　東都平陵先生著　一
此書ハ書法古今異同草隷并仮名ノ用ヒやう出処ヲ詳説ス

書札指南　長玄海堂筆　一
此書ハ諸通用文章を大字にて認め手跡の手本又此書の文章乃文字を上中下にわけ其外証文等の八景を加へ其外要用の字引あり

遊玉用文筆法蔵　絵入　一
此書ハ文章を大冊画入にしたる日用重宝の文を集め幼童をしてさとしやすく教へたる文章の手本となる重宝の文数多のせたり

花月文章　栗川書　一
男女の用文章にしてこれ大字の手本なり

文章亀鑑　同筆　一

筆法温知書　篠田書　一
此書ハ筆の持やう字体肥痩の次第九筆八病の法法の始りに記を書を好む人の見るべき書なり

御武用童子訓　絵入　一
此書ハ北条泰時の定め上らせたる式目之文を書に注釈し童蒙のさとし安き教訓の書なり

万年大雑書永代暦　一
此書ハ世上に数多ある雑書と違ひ正月より十二月まで一月ごとの吉凶悪をわけ見安き事此書にかぎるなり

大万宝節用字海大成　一
此節用集ハ今流行の文字をあつめ又大武鑑書札式法其外いろいろ画図なども入れ日用重宝なる物類は委く文用文章手紙文に至るまでかきのせたり

女五常訓倭織　貝原先生著　絵入　一
此書ハ婦人の為に身に行ふべきいはゆる五常の道を児女にもさとしやすくわけて大字にてかき教訓の書也

女童子訓蒔草　同先生校訂　絵入未刻　四
此書ハ女たる小児女婦人よむべき其要を述べ女子の教となるべき書の事を記せし

大和女訓　井沢長秀著　絵入　三
此書ハ婦女の教訓数々条々烈女の伝等を記して女の教となる事多く行はれ

改正日本輿地路程全圖　赤水先生著　一
此圖ハ六十余州ノ山岳江河城地郷村神祠佛閣名所古跡街道海路マデモ地形方位ヲ微細ニシルス

字引大全　一

長半かれし節用集　十三门部分　一

増補好文節用集　小本 世話字引付　一

古今立花指南大全　一
此書ハ立花〔illegible〕の図を顕し其外秘傳奥旨を述〔illegible〕立花〔illegible〕微細〔illegible〕

甘氏印正　明秣陵甘暘旭述 清劉光君原校　一
此書ハ上ミ篆原ヨリ起リ印論ハ秦漢ヨリ明清ニ至ル各朝ノ體製品類鈕形等精論ヲ挙ク肉製ニ至ルヰ迄少シモ洩ルヿナシ

童蒙手引筆道三部書　沙門鑒靈述　三
此書ハ筆の持やう始め〔illegible〕

重鐫日本輿地路程全圖　小形国分彩色　一

改正日本圖　小形同　一

大日本指掌細見圖　大統〔illegible〕里数付　一

法曹至要抄　坂上兼明著　三
此書ハ〔illegible〕律令格式の中より法家の至要を〔illegible〕

賸餘小録　東都山白散人選　二
此書ハ〔illegible〕

痘疹心得草　〔illegible〕　一
此書ハ〔illegible〕

同呪誦法記　同　小本　一
此書ハ〔illegible〕

同紅大よ里　同　一枚摺
此書ハ〔illegible〕

同美面定　同　一枚摺
〔illegible〕